武勇伝（改）

生時（レジェンド）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武勇伝（改）

【Ｎコード】

Ｎ２００８Ｇ

【作者名】

生時（レジェンド）

【あらすじ】

格闘小説「武勇伝」を自分なりに、修正するつもりです。初心に戻って頑張ります！

序章　天神流（前書き）

あんまり内容は変わらないですよ＾＾

序章　天神流

忍術―日本の古武術（忍術の中に武術が含まれ、古武術の中に流派によっては忍術が含まれている）で、その歴史は古く、その術は修験道の山伏によって、より高度なものに高められていった。彼らの呼び名は一般的には忍者、忍び、忍術使いとよばれているが、昔は乱破（らっぱ）、透破（すっぱ）、密偵、間諜（かんちょう）間者、諜者、三つ物、隠密などと呼ばれていた。
また、聖徳太子は情報活動する者達を志能便と名づけた。

忍びが主に活躍したのは、鎌倉～江戸時代だ。
また、あの魔王と呼ばれた天下人、織田信長が、一五八一年（天正９年）大軍を率いて伊賀に攻め込んだ。
「第二次天正伊賀の乱」である。
多くの伊賀者は惨殺された……
その生き残りで、後に天神斎と名乗る忍びが忍術を戦闘向けに編み出したのが天神流忍術である。
そのため逃げたり、身を隠したりする術は無い。

天神斎が何故天神流を編み出しかは不明である。
もしかしたら織田信長を殺すために編み出したのかもしれない。
だが、織田信長は、翌年の天正１０年に、明智光秀の謀反により、本能寺で自害した。

そして、時代は流れ……
この平成の世にも天神流の技を使う男がいた。彼は強くなるために修羅と名乗り喧嘩に明け暮れていた。
そしてさらに月日が流れた……

第1章　喧嘩屋修羅参上

「また遅刻だ～」
そう叫びながら学校に向かう少年がいた。
彼の名は神威龍一である。
女の子のような顔で体つきも華奢で、まさに、かわいらしい女の子といった感じだの少年だ。
彼の父は伝説の格闘王と呼ばれるほどの格闘家であったが、彼が生まれたと同時に謎の引退をしている。

龍一は私立桜木高校に通う一年生である。
彼がぎりぎり学校に着くと、後ろから絞め技をしてこようとしてきた少年がいた。
彼の名前は嘉納四郎……髪を茶色に染め、柔道の経験がある少しヤンチャな少年だ。
「また龍ちゃんいじめてる。もうすぐ先生が来るよ」
そう言ってきたのは、新戦会空手の館長後藤　勇の娘、後藤舞であるその隣には、彼女の幼なじみでもあり、同門でもある沖田一という少年がいた。
二人共空手初段の腕前だ。

「やっと授業が終わった！さて帰るか」
と、四郎が言った。

四人で帰宅途中同じ高校に通う男子生徒が二人、三人のヤンキーに絡まれていた。
「あんた達なにしてんのよ」
舞がヤンキー達にそう怒鳴った！
「んだ～てめえら～は！？」

ヤンキーの一人が言った。
「おまえら桜高のもんだろう！？」
そう言うと男子生徒の顔を殴った！
ついに舞は切れ、彼女のハイキックが炸裂した！
「俺達に喧嘩を売るってのか？俺達のバックには修羅さんがいるんだぜ！」
四郎はやばいと思った。一と龍一も舞を止めに入った。
「明日から桜校狩りだ！」
そう言って三人は去っていった……
四郎がおびえながら、
「ど、どうする相手は修羅だぜ！あいつらマジだぜ！？」
男子生徒二人も怯えていた。
「なにビビッてるのよ。あんた達男でしょう。修羅だかなんだか知らないけど、あんなの口だけよ。だから不良って嫌いなのよ」
舞は強気でいた。
「お前は、修羅の強さと恐ろしさを知らないんだ。あの男と互角にやれるのは大河虎次郎（たいがこじろう）くらい」
四郎はまだ怯えていた。

そして次の日の下校時間、帰宅途中四人の前に昨日のヤンキー達が現れた！　「こいつらですよ。修羅さん」
その男はガタイもよく、いかにも強そうな男だ。他にも強そうなヤンキーが五人、合計九人だ！
「他の生徒は関係ないわ。相手は私一人よ」
さすがの舞も少し怯えた表情であった。
「舞ちゃん僕も相手をするよ」
一も震えながら構えた。
四郎も覚悟を決め戦う気だ。
その時、龍一が笑顔で、
「すいません。お願いですから僕の友達に手を出さないで下さい」

と頭まで下げた。
「駄目だ！昨日言ったよな。今日から桜校狩りが始まるって……」
「まあ、待て」
「修羅さん！？」
「そこの女が俺の女になるなら考えてもいいぜ！？」
舞は迷ったが
「そ、それで、皆がたすかるなら……いいわ……」
と彼女は答えた。
「駄目だよ。舞ちゃん、舞ちゃんには一君がいるじゃない」
実は舞と一は付き合っていたのだ。
「んじゃ～やるか！？修羅の強さを見せてやる」

その時龍一が、普段より低い声で、
「あんたが修羅の名を使おうがかまわない。だが友達に手を出す事は許さん！」
龍一の表情が変わった。
修羅は龍一に向かって、
「上等だ！てめえからやってやる！」
すると
「てめえら～、本物の修羅の強さと恐ろしさ、忘れた分けじゃあるまいな！？」
龍一の眼つきが鋭くなった。

「龍ちゃん！？」
「お、おいあの目あの口調……あいつ本物の修羅じゃねえか！？直樹さん、だから修羅の名を、使うのはやめたほうがいいと言ったじゃないですか！？」
そう、龍一こそが本物の修羅であった。
「どうする？やるか？」
「と、とんでもありません」

その時、後ろから一人の男の声が……
「やっと見付けたぜ！龍一」
その男こそ大河虎次郎であった。
黒髪を逆立て、鋭い目、手には木刀を握りしめていた。
「虎次郎、久しぶりだな。」
「あ、あ、あいつが……た、た、大河……こ、こ、虎次郎」
四郎はかなり震えていた。
だが、彼が震えるのも無理はない。目の前には、修羅と虎次郎の二人の化け物がいるのだから……
「今日こそケリを着けてやるぜ！龍一！」
「上等だ！」
「あれが龍ちゃん！？あのやさしくておとなしい……まるで別人」

最初に攻撃をしかけたのは、虎次郎だ。
龍一の顔面にパンチが……だが龍一は虎次郎の頭上より高く跳び、一回転してかかと落とし、だが虎次郎もかわした。
だが龍一は、そのまま、もう片方の足で虎次郎を蹴り飛ばした。
天誅と呼ばれる天神流の技だ。
バキッ！
という音共に、虎次郎はそのまま倒れた。

虎次郎はすぐに立ち上がり、今度は持っていた木刀で攻撃しようとしたが、龍一はすかさず、後方宙返りと同時に顎に蹴りを放つが、虎次郎はかわす。だが龍一は体をひねらせ、こめかみに再び蹴りを放つ！
さすがにこれも虎次郎はかわせなかった……
この技は、双龍と呼ばれる技だ。
だが、龍一が着地すると同時に、再び虎次郎が木刀で攻撃……
龍一の頭に虎次郎の一撃が決まった！

舞達は、二人のタイマンを止めたいがどうする事もできなかった……
「龍一君、さすが格闘王の息子だ。でも戦い方が、格闘王とはまるで違う……舞ちゃんもビデオ見たから分かるでしょう！？」
「そうねぇ。一ちゃん、格闘王が編み出した神威流とは全然違う」

神威流とは格闘王が編み出した総合武術である。
少しずつ虎次郎が押し始めた。
「龍ちゃん、もうやめて～」
だが舞の声は龍一にはすでに聞こえない……
「どうした龍一、高校に入ってふ抜けたか！？お前の強さはこんなもんじゃないはずだ！」
「勝負はこれからだ！」

龍一は虎次郎のパンチを受け、関節を決め、投げた後、虎次郎の喉にかかと落とし、だが虎次郎は紙一重でかわした。
これは雷鳴という技だ。

「虎次郎、化け物だな！？天神流忍術雷鳴をかわすとはよ。」
「どうすれば、龍ちゃん達を止められるのよ！？」
震えて動けない3人……その時！
龍一が何かを投げた。それは手裏剣の一種、飛苦無である。

一般的に手裏剣は忍者の武器と思われがちだが、手裏剣術も古武術の一つである。
　また、この苦無は、元々職人の道具で、所持していても怪しまれないため、江戸時代の頃は、この飛苦無がよく使われていた。投げ方も、直打法と反転打法がある。直打法は、手裏剣を手中に持つ時、剣先を指先の方に向けておき、剣先を的に向けて進行させる打法である。反転打法は、手裏剣を手中に持った時、剣先を手首の方向に

向けて、手と的の空間で、剣を半回転させて、剣が的に達した時、剣先が的に命中するように打つ打法である。

だが虎次郎は飛苦無を、木刀で受けとめた。

「あいつらマジで殺し合う気か！？」

すると舞達の後ろから女性の声が……

「まったく、高校に入って少しは真面目になったと思っていたのに……」

後ろを振り返ると、ものすごい美人がいた。

長い髪を茶色に染めている謎の女性……

舞が女性に話かけた。

「あの龍一君の事知っているんですか！？」

「知っているわよ。何しろ私があいつに天神流を教えたんだから」

彼女の名は月形瑠奈（２６）天神流十七代目！普段は喫茶店を経営しているが、裏の世界ではアルテミスと呼ばれるプロのスイーパーだ。

「お願いです。二人を止めて下さい！」

舞は泣きながら瑠奈にお願いした。

「最近あいつは明るくなった……出会った頃はいじめられっ子で中学の時は喧嘩ばかりしていたあいつが・・・こんな素敵な友達がいたからなんだねぇ」

そう言うと瑠奈は龍一の所に歩き始めた……

「そろそろ終わりにしようぜぇ！虎次郎！臨、兵、闘、者、皆、陣、列、在、前、天神流奥義龍神！」

「リュウ！実戦でまだ奥義は使うなと言ったはずだ！それに大切な

友達を泣かすな！」
「ル、ルナさん……！す、すいません」
獣のような龍一が、彼女の声で動きが止まった。まるで飼いならされた猫のようである。
「チッ、またあの女か……龍一、必ずいつかケリは着けるからな。女その後はお前だ！」虎次郎はそう言って去っていった。
「私に、ちょっかい出して、タダですむと思っているのかしら……帰るよ。リュウ」
「はい、ルナさん」
そして、二人は帰っていった……

翌日……

「昨日はすごかったな龍一、まさかお前が修羅だったなんてよ。今までの事、怒っている？」
四郎は必死でいじめた事を謝っていた。
「気にしてないよ。それに僕の方こそ、みんなに、黙っててごめん。皆が良くしてくれるから言い出せなくって僕小四のときまで本当にいじめられていたんだ。伝説の格闘王の子供のくせに弱いからって、中学生までまじって毎日殴られたり蹴られたり、その時に助けてもらったのがルナさんなんだ。そして泣きながらお願いして弟子にしてもらったんだ。修行は厳しかったがルナさんがいたから……」
龍一の顔が赤くなっていた・・・
「龍ちゃん瑠奈さんの事好きなんでしょ！？」
舞が龍一に問いかけた。
「やっぱ分かった？」
龍一は照れながら答えた。
「でもあんな美人なんだから彼氏いるだろう？」

四郎がそう言った。
「今はいないらしい……でもルナさんの心の中にはある人が……あっ、そうそう話は　もどるけど喧嘩屋やっていたのは強くなるためには実戦が必要だと思ったから、でも町の悪餓鬼の中では強くても格闘家としは全然……武道家じゃないけど、これじゃルナさんにいつまでたっても、追いつけない。父さんにもね……父さん表じゃ不敗だけど引退前にある人と戦って負けてるんだ」
「うそ！あの伝説の格闘王が！？」
三人同時に同じ事を言った。
「会った事ないけど父さんを倒したその人の名は天神流十六代目月形　良昭大先生。瑠奈さんのお父さんだよ。おそらく父さんは負けたから引退したんだと思う」

「会った事ないって、瑠奈さんのお父さん今、何してるの？」
と舞が聞いてきた。
「……今はもういない……殺されたんだ……天神流の十七代目後継者になるはずだった人で瑠奈さんの恋人だった武田　武さんも戦死した！相手は瑠奈さんや武さんとは兄弟弟子の水谷　凍矢、瑠奈さんの話では凍矢は重症を負ったが生きてるらしい……」
しばらくの間沈黙が続いた。

そして、
「そろそろ帰ろうぜ」
四郎は席を立って帰る準備をした。
「なあ龍一、忍術を学んでいるという事は、お前は忍者なのか？」
「いや、創始者が忍びの出身だから、天神流忍術と名乗っているが、天神流の者は影で暗殺したり諜報活動したりはしない。ただ、強者を求めて戦う修羅……そのため逃げたり、身を隠すなどの術はないんだ」
「そうなんだ」

その頃違う場所で一人の少年が五人のヤンキー達に囲まれていた。
「てめえ～この前はよくもやってくれたな」
少年は顔色を一つも変える事無く
「悪いけどこの中に、僕を本気にさせてくれる人はいなかった……
僕はいそがしいんだ。それじゃ」
そう言って、去ろうとした……
「待て、コラー」
「しょうがないな～」

数分後……
ヤンキー達は血まみれになっていた。
彼の名は小林　秀一。名門聖蘭学園二年生。頭も良くルックスも良く、また少林寺拳法の達人で、文武両道の少年だ！

少林寺拳法・・・少林寺で達磨大師が授けたという心身鍛錬の法を起源とする拳法を少林拳という。
そして宗道臣（そうどうじん）という日本の武道家・思想家が、中国滞在時に中国武術の達人たちより指導を受けた各種の技法を取り入れ、さらに幼き頃より、祖父宗重遠から教わった不遷流などの日本の古武道を宗道臣がまとめ、創始した武道が少林寺拳法である。
少林寺拳法の名は、宗道臣が嵩山少林寺で、中国武術の一つである義和拳の法門継承式を行った事から少林寺拳法と名づけられた。
また中国の少林寺は、唐手やムエタイ、それにテコンドーなどの全身となっている。

その頃、龍一達が帰宅途中、向こうから美少女が手を振りながら歩いて来た。
「舞じゃない？それに一君も、久しぶりねぇ。」
「恵！？……ホント久しぶりねぇ。」

彼女は舞と一の幼馴染で、聖蘭学園に通う相川恵であった。
「相変わらず舞と一君仲がいいね。」
「恵は彼氏いないの？」
「……好きな先輩はいる。でも頭もいいし、かっこいいから私なんか相手にされないと思うの」
「何言ってるの、恵も頭はいいし、すごくかわいいから、うらやましよ。」
舞は彼女を励ました。

しばらくすると、向かうから秀一がやって来た。
恵の顔が赤くなった。
どうやら彼女の好きな人は秀一みたいだ。
「恵もしかして彼が？」
「……うん」
「話しかけたら」
恵は秀一に話かけようと彼に近づいた。
「僕になんか用かい？悪いけどいそがしいんだ。」
恵は下を見たまま黙ってしまった。
その時、秀一の態度に舞が腹を立てた。
「ちょっと、あんた！」
「おや、君かわいいね。名はなんて言うの？」
どうやら秀一は恵より舞の方を気に入ったみたいだ。
「ふざけないで！」
舞がまた怒鳴った。
やばいと思い、龍一が止めに入った。
その時、秀一が龍一に回し蹴りを……龍一は紙一重でかわした……
「なにをするんですか？」
と龍一が言った。
「見付けたぜ！あの恐怖はわすれてないから……」
秀一が龍一にそう言った。

「僕はあなたと会うのは初めてですよ！」
「二年くらい前かな……金髪の少年が五人いやもっといたかな……一瞬で五人以上の不良達を倒したのは……あの時初めて恐怖と言うものを感じた。今でもその恐怖が頭から放れない……その恐怖を忘れるためにはその男を倒すしかないと思った……髪を黒くしても僕には分かる君があの時の金髪の少年、喧嘩屋修羅だろ！私怨はないが僕は君を倒す！」
「先輩やめて下さい！」
恵は必死で止めようとした！
舞達も止めようと説得した。
もし龍一がこの前みたいになったら止める事が出来るのは瑠奈だけ、しかし舞たちは、瑠奈の経営している喫茶店の場所が分からない……

秀一はすでに戦闘モードに入っていた。
「でも君には感謝している。君を倒したい思いで修行に励んだ。君に会うまで僕は天狗になっていた……僕の名は小林　秀一！君の本当の名を聞いておこう」
「僕の名前は神威　龍一！」
「神威？もしかしたらあの格闘王の？」
「格闘王は僕の父です。」
「どおりで強いはずだ。」
「父さんは父さん！僕は僕だよ！」
秀一は構えた。
「その構え少林寺拳法か……でもあなたと喧嘩する気はないんです。」
と龍一は言ったが、
「君も武道に心得があるんだろう！？ならこれは武道家としての異種格闘技戦だよ」
そう言うと秀一はジャンプして、また回し蹴りを……
龍一もまたかわすが、止まらない……そして、龍一の頬をかすめた。

「旋風脚かい。」
龍一の表情が変わった……
龍一は高く跳び、一回転、この技は、天神流天誅！
秀一の頭に龍一のかかと落としが決まり、その後、もう片方の足で蹴り飛ばした。

「これだよ……戦いとはこうでなくては……」
秀一はニヤリと笑った。
「空手！？いや違うか……柔術か……！」
「天神流忍術だ！」
そう言うと飛苦無を投げた。
秀一は右の方に避けたが、その方向に龍一の回し蹴りが炸裂！
だが同時に、秀一の正拳突きが、龍一の顔面に炸裂した。
龍一は後方中返りをして、顎に蹴りをさらに体をひねらせこめかみに蹴りを……
「天神流双龍！」

バキッ！

さすがの秀一もかなり効いたようだ。
膝をつき倒れそうになったが、すぐに立ち上がった……

「あんたも化け物だな！？双龍をまともに喰らって立ち上がるか」
もうこうなったら、瑠奈以外止められない。
秀一がまた正券突きを、だが龍一はかわして、なんと秀一の頭の上で、片手で逆立ちした！
「あいつら雑技団か！？」
と、四郎が言った。
そして龍一は秀一の髪をつかみそのまま膝で秀一の顔面に攻撃！

だが秀一は両腕でガードをした……
二人は後方宙返りをして、距離を置いた……

その頃、さっき秀一にやられたヤンキー達が、龍一達の近くまで来ていた。
「あ、あの野郎じゃねえかぁ！？しかも相手は修羅だ！いや、待てよ。ここでしばらく様子を見て、やつらがくたばりかかったところを、俺達がとどめをさす。そうすれば俺達は修羅まで倒して有名人だ！」

ものすごい攻防戦が繰り広げられていた。
秀一も、さすが少林寺拳法の使い手だけある。二人の実力は互角……
これで、同年代で龍一をここまで追い詰められるのは、虎次郎と秀一となった……
二人はすでに血だらけとなっている。
その時！
「今だー！二人をやれ～」
隠れていたヤンキー達が襲いかかってきた！
「センパ～イ」
秀一はすでに動けない……
そして秀一の頭に木刀が……
バキッ！
鈍い音が響き、血が……
だが血を流したのは恵だ。
なんと恵が秀一の身代わりになったのだ。
「なんで僕をかばったんだ！？」
「先輩の事が……ハアハア……好きだからです……」

そして、龍一が完全に切れた！
「てめえら～、そんなに死にたいのか！？」

龍一は五人のヤンキー達を血祭りにした。

恵は、救急車で病院に運ばれた。
恵の怪我は、運良くそれほどたいした事がなかった。
「惚れたのは僕の方かも……」
と、秀一がつぶやいた。
舞や龍一達は喜んだ。
そして、寝たふりをしていた恵は涙が止まらなかった……

第1章　喧嘩屋修羅参上（後書き）

キャラデータ
神威龍一・・・この物語の主人公！女の子のような容姿だが、天神流忍術の使い手で、最強の武道家を目指している。
小学４年までいじめられていたが、瑠奈に助けられ、弟子となる。
中学時代は、自ら喧嘩屋修羅と名乗り、強くなるために喧嘩に明け暮れる。
名前は、僕の憧れのヴォーカル、神威楽斗さん（ガクトさん）と河村隆一さん（隆の字を龍に変えている）を合体させました。

第2章　摩利支天

　龍一と秀一のタイマンから一週間が経った……
いつもの四人は瑠奈の喫茶店　「ＬＵＮＡ」にやって来た。
龍一以外の三人は初めてだ。
「すごくオシャレな店ですね～」
　舞はすごくはしゃいでいた。
「ありがとう……いつでも来てね。」
「しかし秀一さんと、恵ちゃんこれで決まりだね！？」
と一が言うと、四郎が龍一に
「いつコクるんだ？」
と、からかってきた。
「なんだ、リュウ好きな人がいるのか？」
瑠奈に言われると、龍一は心の中で、ルナさんが好きです！いや愛しています！とっ　言いたいと思った……

「リュウ、お前は、顔は悪くないし運動神経もいい・・だがその秀一って子と違って頭の方が……舞ちゃんこいつにいい子紹介してあげてよ。」
「は、はあ～でも皆彼氏がいるみたいなんです」
舞は龍一と瑠奈がうまくいけばいいのにと思った。

「ごちそうさまでした。」
舞達は店を出た……

　次の日、龍一は遅刻をしたため、トイレ掃除をさせられていた……

こんなどこにでもいそうな少年が、街の悪たちから恐れられているとは……
四郎は舞と一に
「先に帰ろうぜ。」
と言った。
三人は龍一を置いて先に帰ることにした。

帰宅途中、秀一と恵に会った。
「恵、怪我の方はだいぶ良くなったみたいね。」
「うん、もう大丈夫よ。」

その時、五人のゾッキーが現れた！
彼らは摩利支天と言う暴走族のメンバーだ！

「昨日はこいつらが世話になったみたいだな！？」
ゾッキーの中の一人が言った。
彼は摩利支天の七代目、高橋雅史（１８）だ！
「秀一さん、また喧嘩したんですか？」
と、一が聞いた。
「昨日、恵にちょっかいをだしていたんでね……でもあそこまでボコボコにしてないけどね」
「小僧おれは、パンピーでも容赦しねえぜぇ！」

秀一は構えた……
そして二人のタイマンが始まった……ものすごい激戦だ！
秀一は後方宙返りをし、距離を置いた。だが秀一が膝を付いただがマサシの攻撃は止まらない……
「やばいぞ！」
四郎は、震えながら言った。
舞が止めようとした。

だが、マサシが舞を突き飛ばした。
「族をなめんなよ！コラー！」
そして、マサシが秀一にとどめをさしに……
するととっさに舞は
「私達には龍一君がいる！」
と叫んだ！
ゾッキーの一人が
「龍一……誰それ？」
と言った。
「てめえらはだまっとれ！おい龍一がいるだと！？上等だよ…てめえら……」
「龍一君は強いはよ」
「ああ～強い……ちょっと前まで俺もヤツが怖かった……」
するとマサシは、ナイフを出し何の躊躇もなく秀一の太ももを刺した！
「ぐわ～！」
秀一が叫んだ！
「やつに伝えろ！明日の土曜集会で待つと……」
そしてマサシ達は去っていった……

秀一は病院に運ばれた。
龍一も舞から連絡を受け駆けつけた。
「舞ちゃん、秀一さんをやったのは本当にマサシなんだね！？」
すると舞は、
「ごめんなさい……龍ちゃん、私を殴って……私、龍ちゃんの名前を勝手に……だから殴って！」
「何言ってんだよ。そんな事出来る分けないじゃん。それにそんなこと関係ない」
「そうだ瑠奈さんにたのめば……」
と、四郎が言った。

「ルナさんは関係ない…これは修羅と摩利支天の戦いだ」
そう言って、龍一は家に帰っていった……

「おかえり、龍一」
「ただいま、母さん」
「兄ちゃんお帰り！ねえゲームして遊ぼうよ」
龍一には七つ下の弟がいた。
「ごめんな、龍之介、今日はそんな気分じゃないんだ」
龍一は部屋にもどると、しまってあった特攻服を取り出した。
「まさか、またこいつを着るとは思わなかった……」

次の日の夜、龍一は再び金髪に染め「修羅　参上」の文字が入った特攻服を着て、木刀を持って、家を出た……

途中、龍一の前に一人の男が現れた！
彼の名は西村和也（２０）　摩利支天の六代目の頭をはっていた男だ。
「龍一、本当に行くつもりか？」
龍一はタバコをくわえ火をつけた。
「カズヤさん止めても無駄ですよ」
「止めはしない、もうチームも俺には関係ないし……ただ、マサシは強くなった……あいつに、七代目を譲ったのはあいつに俺は負けたんだよ…それに今、特隊をしてるのはトオルだ！」
特攻隊長をしている岡村徹（１８）は龍一の二つ上で、龍一が、中学時代の時の親友だった男でボクシングの経験もある強者だ。
「関係ないっスよ…今の俺は、カズヤさんが頭をはっていたチーム

を潰そうとしている男です……トオルだろうと誰であろうと邪魔するヤツはぶっ殺す！」
「龍一！」
龍一は、振り向くことなく、戦場へと向かっていった……

その頃、舞達は瑠奈の所に向かっていた。
「瑠奈さん大変です！龍ちゃんが……」
舞達は必死で瑠奈に事情をはなした。
「そう……秀一君の仇を討ちに……あいつを修羅にしてしまったのは私のせい……私はあいつの両親に悪い事をしたと思っている。格闘王が引退したのは、私の父に負けたからじゃない、本当は自分の妻、つまりリュウの母の事を思って、引退したのよ。自分が試合で傷ついた姿を、これ以上見せたくない、だから引退し、技を封印し、リュウに武術を教えなかった……だが私は、あいつに技を教えた。あいつの父、格闘王を倒した天神流を・……最初は、あいつがいじめられていたから、護身術のつもりで教えた……どうせ、すぐに逃げ出すと思ったし……だがあれからもう6年がたった……よく耐えたよ、あいつは……あいつの気持ちは分かっている、けど私は裏の世界で生きる女……あいつには、もっといい女性が現れるさ……さて行ってくるね」
「私達も付いていきます！龍ちゃんは大切な友達なんです」
「（……リュウ、いい友達をもったね）」
と、瑠奈は心の中で喜んだ……

すでに、修羅対摩利支天の戦いは始まっていた。
「今宵の月は、我を狂わせる……」
龍一はそうつぶやいた……
すでに十人以上倒したが、相手は五十人以上いる。
「下がれ～おまえらでは無理だ！」

「ト、トオルさん……」
ついに龍一とトオルのタイマンが始まった。
「トオル何でこんな腐ったチームにまだ入やがる！」
「お前とまさかやる事になるとはなぁ……お前にとって腐ったチームでも、俺にとっては大切なチームなんだ！だから特隊としておまえを倒す！」
トオルのストレートパンチが炸裂した。
龍一はふっ飛んだ
更に、トオルの攻撃が続く……

だが、一瞬のスキを見て、龍一がローキックからハイキックを……
今度はトオルがふっ飛んだ
更にトオルの頭に龍一の木刀が……だがトオルはかわした。
龍一は木刀を投げ捨てた。
「お前とは、素手で戦いたいからな～」
すざましい戦いが続いた……
再びトオルのストレートパンチが……だが龍一は紙一重でかわし、関節を決め投げた
そして、トオルの喉にかかと落とし……これは天神流雷鳴……
だが、龍一はわざと外した
「龍一、俺の負けだ……」
ついに龍一が勝った。
龍一は、マサシのほうを見て叫んだ！
「マサシ！俺とタイマンだ～」
「てめえら～、修羅を殺せ！」
龍一は、再び木刀を持ち、マサシのほうへ突進していった……
「邪魔だー！」
次々と摩利支天のメンバーが倒れていく……
「（な、何だ！？早すぎて何が起きているのか分からん）」
龍一の動きは、まさに電光石火……

「マ、マサシさん！」
「情けね～ヤツらだ……龍一あんまりいきがるなよ！」
「マサシ、てめえ～、いつから俺にタメ口利けるようになった！？」
「てめえの方こそ年下のくせに調子にのるなよ！？」
龍一が、木刀でマサシの頭をかち割ろうとしたが、マサシのナイフが龍一の腹に……龍一は素早く避けた！マサシのナイフ攻撃が続く……
だが龍一は全て避け、マサシの手に蹴りを放ち、マサシはナイフを落とした。
龍一も木刀を投げた。

その時ようやく瑠奈達が現れた。
そして……
「臨、兵、闘、者、階、陣、列、在、前、天神流奥義龍神！」
ついに龍一は実戦で奥義を使った。

龍神は水神・・・降りしきる大雨を、避けるのは不可能・・まさに奥義龍神は、降りしきる大雨・・・常識を超えるスピードで相手の急所を確実に攻撃する。あまりの速さで数秒の間、相手を宙に浮かし動きを封じる・・・これが龍神である。

「ぐは～」
マサシは吹っ飛び、そのまま立ち上がる事が出来なくなった……
「秀一さんの太ももを刺したよな～！」
そう言うとマサシのナイフを拾って、そして、マサシの胸めがけて……
だが、その時、瑠奈の投げた石がナイフに直撃！
パリン！

と、ナイフが折れる音がした。
「運が良かったな、今の俺を止めれる人がいて……」
瑠奈は、龍一の方に向かっていた……
そして、
「お前は、ついに私との約束を破って奥義を使った……お前は今日から破門だ」
そう言うと、瑠奈は去っていった……

誰もがあまりの事で言葉を失った……
もちろん瑠奈は、龍一の事を思い、したことである。これで自分の事を忘れ、すばらしい女性に出会い、幸せになってくれると思ったからだ……

摩利支天との戦いから二週間が経った。龍一は天神流を破門されたことで、ただ今を生きる事しか頭になかった……
最強の格闘家になる夢を忘れて……

龍一が、公園を散歩していたら、真面目そうな高校生カップルを見付けた。
自分には、ああいう青春が今までなかったな～と思いながら、歩き始めた。
すると、カップルの前に二人組みのヤンキーが現れた。
「ねえねえ、お姉ちゃんそんなヤツより俺達と遊ぼうぜ～」
彼氏は震えながら彼女を守ろうとしていた。
「俺達、君には用はないんだよ。」
その時、龍一が現れた。
「嫌がってるじゃないですか。」
「何だ、お前？殴られたいのか？」
「僕を殴って、気が済むのでしたら、いくらでも殴って下さい。」
ヤンキー達は龍一をボコリ始めた……

その時、四郎と一が現れ、四郎が、ヤンキーの一人に背負い投げ、と同時に一が、もう一人にハイキックが決まった！
「二人共ありがとう……そういえば舞ちゃんは？」
龍一が聞いた。
「舞ちゃんは、今日は用事があるみたいで……僕達これから秀一さんのお見舞いに行くんだけど、龍一君も行かない？」
と一が聞いてきたので、龍一は行くことにした。

その頃舞は、瑠奈の店にいた。彼女は何とか瑠奈と龍一のよりをもどそうと、考えていた。
「瑠奈さん、お願いです。龍ちゃんを許してあげて下さい」
舞は瑠奈にお願いした。
「別に私は、あいつが奥義を使ったから破門したわけじゃないのよ。前にも言ったように私があいつを修羅にしてしまった……私があいつの前から消えれば、私の事を忘れ、そして幸せになってくれる……そう思ったからよ」
「確かに龍ちゃんは最近変わった……今まで、遅刻はするは、授業中はほとんど居眠りしてました……だけど最近は誰よりも早く来て授業も真面目に受けている……でも、なんか、今をただ、生きているって感じがするんです。」
「そう……でもそれでいいのよ。あいつには、私みたいな汚れた人間になってほしくないの……天神流は、しょせん人殺しの技……あいつがまだ、強くなりたいと言うならば、新戦会に入門させてあげてよ」

その頃、龍一達は秀一の見舞いに来ていた。一以外の三人はタバコを吸うので四人は喫煙室にいた。といっても、彼らは未成年……当たり前の事だが、未成年の喫煙は、法律で認められていない。

「龍一君タバコ吸わないのかい？一君達からいろいろ聞いたよ。本当に格闘技を辞めるのかい？そうだ！龍一君、ジャッキー・リーの映画が好きなんだよね！？燃えよ酔拳のＤＶＤがあるんだけど、観る？　」

と、秀一が聞いた。

「……もう僕は、強くなりたいと思わないんだ……」

「龍一君、君がお父さんや瑠奈さんを超えたいと同じように僕や舞ちゃん、四郎君や秀一さん……そして虎次郎も皆、龍一君を目標にしているんだよ。」

と、一が答えた。

「僕は昔から変わらない……弱虫君なんだよ」

するとその時、一人の男が声をかけてきた。

「君達も格闘技をやっているのかい？」

その男の名は野村昇児（２７）でクローン病という難病を抱えている不良患者だ。

クローン病とは消化器の病気で、主に小腸や大腸に潰瘍ができたりし、狭窄つまり、腸が細くなったり、ろう孔と言って腸に穴が開いたりする。

彼は十八の時にクローン病と診断され、数え切れぬほどの入退院を繰り返し、オペも三回している。今の医学では完治はしないが、主な治療は点滴による絶食や薬物治療、そして外科的治療である。

「俺もガキの頃、少し少林寺拳法を学んでいた事があるし、病気してからも実戦空手を学んだ……けど病人は病人、強くなるどころか弱くなっちまった。だから、現実で、格闘をするのはやめて、今は格闘モノの小説を書いて、物語の中で格闘技を続ける事にしたのだ・

……俺は君がうらやましいよ。若いし、なによりも健康だ。実にもったいないよ。」
「……僕は、やはり強くなりたい……そしてルナさんを超えたい！」

その日の夜、瑠奈の店が終わる頃に、龍一が現れた。
「何しにきた？」
「破門されて、ここに来れる身分じゃありませんが、僕は一つ、言い忘れた事があります。それは、ルナさんの事が……ずっと前から、あの……その……す、好きです！」
「……くだらない事言ってないで帰りな。」
「ハジメ君達から聞きました。破門された本当の理由……そして、ルナさんが真剣に僕の事を考えていたという事……俺は必ず、ルナさんに認められる男になってみせます！」
最後の言葉に、瑠奈の心が一瞬ときめいた……
そして、龍一は帰っていった。

第2章　摩利支天（後書き）

キャラデータ
月形瑠奈・・・幼き頃に母を亡くし、17の時に父と恋人を失い、その後、天神流17代目継承者になり、一人、裏世界を生きてきた女性。
また龍一の師匠である。
名前は僕の好きなバンドルナシーからです。

第3章　プレシャス

次の日、龍一達が帰宅しようとした時、龍一達の学校に一人の女性が現れた。

「み、南……」

「ハアハア……ひ、久しぶりだな……龍一」

「龍一の知り合いか？それにしても、この女ラリってんじゃ……？ジャンキーか？」

と、四郎が聞いてきた。

彼女の名は杉原南（１８）で杉原グループの会長の娘でもあり、そして、トオルの彼女でもある。

「なぜ、薬物（そんなモノ）に手を出した！」

「ア、アンタには、関係ないだろう……」

と言い去っていった。

「（もしかしたら、まだ北斗さん達は音楽をやっているかも……）」

その夜、龍一達４人は「ビート」と言うライブハウスにやって来た。

そのステージには、プレシャスというバンドが演奏をしていた。

プレシャス……それは、高価な物、貴重な物を意味する。

演奏が終わると、龍一達は外に出た。すると、一人の男が声をかけてきた。

「久しぶりだな、龍一」

彼はプレシャスのヴォーカルとギターを担当している、杉原北斗（２６）である。

また、南の兄であり、なんと瑠奈や凍矢、武とは幼馴染であり、摩利支天の三代目でもある。

他に一見美女と思わせるような美青年、ギターのラン（２６）彼も瑠奈達とは幼馴染で元摩利支天の特隊だ。
またベースのジュンジ（２６）と右腕に龍の刺青をしているドラムのユウヤ（２６）は百鬼という族のメンバーだった。

百鬼はあの凍矢が作ったチームである。その時、瑠奈は、死乃美というチームを結成。摩利支天と百鬼は仲が悪く、また摩利支天と死乃美対百鬼の戦争が起きた時その戦いを止めたのが、武である。

その後、北斗がジュンジとユウヤを誘ってプレシャスが結成されたのである。

「あいつが、薬に手をだしたのは、去年お袋が亡くなってからだ。今のあいつには、何を言っても無駄だ。自分の意思で止めようとしない限り……」
「そうですか……でも久しぶりにプレシャスの音楽が聴けて良かったです。それじゃ～僕達はこれで……」
「俺達も、これから打ち上げがあるんで、またな」

次の日の夜、龍一は舞と一に連れられて、新戦会を見学する事にした。
「押忍！館長、彼が神威龍一君です。」
と、舞が父でもあり、そして、新戦会の館長である後藤勇（４６）に紹介した。
「君があの格闘王の……舞や一からいろいろと聞いているよ。」
「よろしくお願いします！」
龍一は心の中で、鬼がたくさんいるな～と思った。

新戦会は後藤館長以外にも、幹部に四天王と呼ばれる４人がいた。
一人目は土方歳夫師範（３３）
二人目は永倉新一指導員（２９）
三人目は原田光介指導員（２６）彼も瑠奈の幼馴染で元摩利支天のメンバーだった男だ。
そして、四人目は沖田一（１６）である。
また、女子でありながら、一般の部で稽古をしている、後藤舞（１６）など他にも強者ぞろいだ。
静かに見学している龍一に、館長が声を掛けてきた。
「あそこにあるサンドバックを、蹴ってみないないかい？」
そのサンドバックは他のよりも大きく１５０キロはある。
龍一は構えた。
そして、
バシッ！
という音が道場になり響き、サンドバックはものすごい勢いで動いた！
「（恐ろしい小僧だな……）」
さすがの後藤館長も驚きを隠せない様子だった。

練習が終わっても門下生の気合いは収まらない感じだった。
そして、原田が龍一に話しかけてきた。
「君、月形瑠奈の弟子なんだって！？」
「はい、そうです。ルナさんの事知っているんですか？」
「ああ、幼馴染だよ。」
「原田先輩と瑠奈さんが幼馴染ですって！」
と、舞と一は驚いた。
「しかし、あの女の弟子で格闘王の息子じゃあ強いはずだ。しかも、あの恐ろしい女の事が好きらしいねえ～……しかし瑠奈が相手だと難しいなあ……あいつの強さは、生まれて物心がついた頃から、天神流を父親から学んでいた。だが、瑠奈が小さい時に母親を事故

で亡くし、十七の時に父親と恋人の武を殺され、それから、裏の世界を一人で生きてきたからだ。」
「ルナさんは、武さん以外の人と付き合ってないんですか？」
と龍一が聞いた。
「もう俺も８年くらい会ってないからな～……たぶん、いないと思うよ。あいつに下手に、ちょっかいを出そうとして、病院送りになったヤツはたくさんいたけど……だが、君は瑠奈にマジらしいからね～、だから、あいつも君の事を思って破門したんだろ！？」
「そ、そうですが……僕はルナさんをあきらめたくないんです。」
「そうだ、確か北斗と瑠奈が一ヶ月くらいだけど付き合っていたっけ……」
「ルナさんと北斗さんが？」
「ああ、でも何ですぐに分かれたのか、北斗に聞いたら、あいつの心には今でも武が生きている…と言ってたな～」
龍一は会った事のない武田武という人がうらやましく思えた……

次の日、南は公園を散歩していた。すると、子供がボールを取ろうと道路に飛び出した！その時！車が……
南は子供を助けるため、自分も道路に飛び出した！
そして、道路には、たくさんの血が……すぐに救急車に運ばれた。
子供の方はたいした怪我はなかったが、南は……

夕方、龍一達が帰ろうとしたところに、龍一の携帯が鳴った。北斗からだ！

慌てて四人は、秀一が入院している病院に急いだ！
そして、四人が見たのは、二度と動く事も笑う事も出来ぬ彼女の姿であった……
彼女は感じる事すらできぬ場所へ旅立って行ったのだ……
すでに、瑠奈やトオルは来ていた。そして、北斗と瑠奈、トオル、

龍一以外のメンバーは秀一の所に移動した。すると、杉原グループの会長と秘書が現れた。
「親父～何しにきやがった！？てめえは、家族よりも会社の方が大事なんだろう！？」
すると杉原会長が、南に向かって泣きながら土下座をした。
「ううっ・・すまん南、私はお前や北斗に父親らしいことをしてやれなかった……南、だがお前は人のために自分の身を犠牲にしたんだ……これからは、大好きな母さんと一緒に……お前は私にとって、いつまでも貴重な宝だ……」
その姿に北斗は言葉を失った……

その頃秀一達は喫煙所にいた。
そこには、あの昇児もいた。
「ここで俺は、いろんな友と知り合い、そして病で何人もの友を失った……」
そう言うと、その友のために自ら作った曲「祈り」を歌い始めた……
そしてタバコの火を消し部屋にもどっていった……

曲と言えるかどうか分からないが、彼はこの曲を収録した、CDーRを患者に配ったりした。
だが健康な人からは、二百五十円で売っている。その辺のところは、昇児らしい……
音楽の経験は少ないが、彼が、昔バンド時代に使っていた名前は、修羅生死（しゅらしょうじ）である。
荒んでもいいから、強く生きたい……そう思い、つけた名前だ。
だが彼は、肉体だけでなく、精神的にも弱く、馬鹿な連中と馬鹿な事をして、嫌な事から逃げてばかりいた落ちこぼれのクズだ……
そんな落ちこぼれでも、死の悲しみを知っているからか、自殺をしようとした人に、怒った……というよりも、キレたこともある。

もちろん、彼も何度も死にたいと思った事があるが、生きたくても生きられなかった友に申し訳がないし、自殺は人殺しと同じ……だからキレたのであろう……

また、少年時代の彼自身も、龍一ほどではないがいじめられていた。中一の時、お金を持って来いといわれた事もあった。

彼が少林寺拳法を学んでいたのは、小学校のころで、昔から格闘映画や格闘漫画が好きだったのと、たまたま父と兄が学んでいたからである。

だが、弱いがためにいじめられていた……

しかし、中二になると、家庭の事情とかで、学校には遊びに行くだけになった。行きたい時に登校し、授業中は寝ているか漫画を読んだりしていた。さらに、授業中に一人ライブをやって、授業を潰したこともあった……

問題児であったかもしれないが、アニメのキャラに本気で恋をするなど、この頃はまだ、かわいらしい一面もあった。

彼の心が本当に荒んでしまうのは、この後の専門学校に入学してからだ。

昇児は、中学を卒業すると、料理の専門高校に入学する。

この専門学校は彼のような落ちこぼれの集まりな上、教師は暴力教師で、教師が教師を止めに入った事もあった。

どうやら、教師が生徒に机を投げたらしい。さすがに、その教師は解雇された。

今の教育では考えられないが、殴る蹴るは当たり前の学校だった。

それに生徒のほとんどが親に見捨てられている。だから親も何も言わないのである。

そんな学校に通っていたため、彼の心は本当に荒んでしまう……

ついに彼自身も、本気で人を傷つける事が出来る人間になってしまった。
昔は彼自身、いじめられていたのに、今度は彼がいじめをしていたのだ。
だが、彼がいじめられた時その連中を憎んだように、彼にいじめられた人達も彼を憎んでいるはず……
その罪は一生消えないのかもしれない……
だから、パン工場に就職してすぐに、クローン病になってしまったのであろう……
そして、その時に自分の弱さをとことん思い知らされ、退院してから弟が習っている空手道場に通う。
だが病気をしてからも、相変わらず馬鹿な事ばかりしていた。

そんな彼だが、二十代前半に、人のために役に立ちたいと思い、自ら病気の勉強会の役員をすると言い出したのだ。
当時の彼にはお金のことしか頭に無かったのに、ボランティアでやっていたのだ。
その後、仕事が忙しかったり、体調が悪かったりで、会には最近出ていない……

だが、最近になって、本当に貴重な物は、お金じゃなく、こんな自分と共に病気と闘ってくれる家族なんだと気づき始めたのである。

第3章　プレシャス（後書き）

キャラデータ

後藤舞・・・新戦会空手の館長、後藤勇の娘。
恋人に沖田一がいる。

沖田一・・・新戦会空手の四天王の一人で、舞の彼氏。
名前は新撰組一番隊組長沖田総司と、三番隊組長斉藤一を合体させているが、キャラ的には、沖田をモデルにしている。

第４章　瑠奈の過去

その日の夜、瑠奈は幼き頃から、龍一に出会った頃までの過去を思い出していた……

二十年前……

「どうした瑠奈、そんな事では強くなれんぞ！」

「はい、お父様！」

「まあ、今日はこれくらいにして、帰ろう、母さんが、ご飯の支度をして、待っている。」

家に帰ると、瑠奈の母が食事の支度をして待っていた。

「お母様、ただいま帰りました。」

瑠奈にとって、この頃にはまだ、家族がいて幸せだった。

この後に悲劇が起きる事も知らずに……

「瑠奈、明日が楽しみね。」

「はい、武も凍矢も楽しみにしているみたいです。」

「ワシは用事で行けんが、思いっきり楽しんで来い。」

「はい、お父様」

明日は、武田一家と水谷一家と瑠奈と瑠奈の母とでキャンプに行くはずだった。

しかし次の日、悲劇は起きた。

キャンプ場に向かう途中トラックと正面衝突を……

そして、その事故で生き延びていたのは、瑠奈、武、凍矢の幼き三人だけだった……

瑠奈の父良昭は、自分があの時、一緒行っていれば……そう思い、武と凍矢を弟子にした。

三人は、本当の兄弟みたいに仲が良かった

後に瑠奈をめぐって二人が争うなどその時は、知る由もなかった……

それから四年後……

瑠奈達が十歳の時、ある男が現れた。

「月形　良昭殿ですな！？私の名は、神威　武蔵と申す！貴殿と試合たいがために、参りました！」

そう、この男こそ龍一の父、伝説の格闘王である。

「おぬしが今、話題の格闘家か……」

「お父様！」

「お前達は、下がっていなさい……おぬしは何故、私と試合たい？」

「私は今日で、格闘家を引退します。」

「引退？まだおぬしは、二十代後半……まだまだ引退するには早いのでは？」

「妻に傷つく姿をこれ以上見せたくない・・あいつは武道家の妻として、私が勝利すれば、確かに微笑んでくれます。だが、それは心の底からではない……それに二週間前に子も生まれたし……だが、最後にあなたと本気で勝負したいのです！私の師堀辺　正宗先生が、亡くなる前に、もし天神流の後継者に勝てたらお前は、最強の格闘家だ……とおっしゃられて……」

「堀辺　正宗……その名は父から……先代の天神流の継承者から聞いた事がある。よろしい、天神流十六代目として、相手をしよう。」

実は堀辺は、後継者にはなれなかったが、瑠奈の祖父と共に天神流を学んでいたのだ……

その後堀辺は、天神流を捨て、骨法や柔術などの他の古武術を学び、天神流を越える武術を編み出そうとした。

そして、その理想は、龍一の父武蔵に受け継がれていった。

そして試合が始まった！
いきなり仕掛けたのは、武蔵だ！
だが、彼の正拳突きをかわし、天誅が炸裂！
だが、まったく効いてない
良昭は、足払いをし、武蔵が倒れそうになった瞬間、顔をつかみそのまま地面に頭を叩きつけた！
「天神流忍術鉄槌！」
だが、武蔵は立ち上がった。
更にものすごい攻防戦が続いた。
「おぬしは、あの宮本　武蔵の生まれ変わりか？」
「父が、宮本　武蔵のような兵（つわもの）になるようにと願って付けてくれた名前なんで……」
すると彼は、腰に差してあった二本の木刀を抜いた。

あの、宮本　武蔵が、初めて試合をしたのは十三の時。
相手は新当流の有馬喜兵衛で、そして、武蔵は喜兵衛を木刀で殺したという。

「リングの上では武器が使えないんでね～、神威流は体術だけじゃあないんです。」
「二刀流とは、まさに宮本　武蔵の二天一流……だが天神流は忍術、体術はもちろん、剣術、槍術、棒術など様々な武器が使える。
瑠奈！」
「はい、お父様！」
瑠奈が父良昭に、木刀を渡した。
再びものすごい激戦が……
そして、良昭の頭に武蔵の木刀が、だが良昭も木刀で防いだ。
「（胴ががら空きだ）」

武蔵のもう一本の木刀が良昭の胴に、だが良昭は、中国拳法の気功のような技で、気合いとともに、木刀を折ったのだ！
良昭は木刀を捨て、奥義龍神を使った！
武蔵は立つ事が出来なかった……
これで武蔵の不敗伝説は終わった……
だが彼にとって今日の試合ほどすばらしい試合は今までに、無かったであろう……

さらに時が流れて、瑠奈達は中学生になっていた。
この頃になると、瑠奈と凍矢はヤンキーになっていた。
特に凍矢は補導されたり逮捕されたりして、何度も警察の厄介になっている。
武と凍矢と瑠奈は同じクラスで、また隣のクラスには、北斗とランが、さらに違うクラスに原田がいた。
この頃から、瑠奈と武は付き合っていたが、武が瑠奈に何も言はないのは、いつか自らの過ちに気づいてくれると信じていたからだ。

だが中学を卒業して半年経った頃、摩利支天の三代目に北斗が、特攻隊長にはラン、そして、原田がいた。
また、凍矢が作った百鬼にはジュンジとユウヤが……
さらに、瑠奈が結成させた死乃美が……

ある晩ついに摩利支天と苦乃一対百鬼の戦争が始まった。
「瑠奈、武みたいなクソ真面目なヤツよりも、俺の女になれ！」
「凍矢、ふざけんじゃないよ！？」
「お前が北斗か？」
ジュンジが北斗を睨みつけた。
「上等だよ！？お前……」
北斗がそう言った。
「なんだ！？この女みたいなヤツは？」

ユウヤがランを挑発した。
「誰が女みたいだって！？殺すぞ、コラ！」
ランが木刀を強く握った。
物凄い乱闘が……こうなったら、誰も止められない……と思ったら、一人の男が現れた！
「瑠奈、凍矢こんなとこに居たのか！先生が心配しておられるぞ。」
そう、その男は武であった。
「何じゃてめえ～は？死にてえのか～？」
百鬼の一人が武に攻撃しようとしたが……
「そいつに手を出すな！お前らじゃ無理だ！」
凍矢が自分の舎弟にそう言った。
「へえ～以外と仲間思いなんだな！？」
「勘違いするな……お前を殺すのは、この俺だ！てめえら～行くぞ！」

この戦争をきっかけに、瑠奈は武にふさわしい女になろうとするが、凍矢はかなりのワルになっていた……
そして、その傍若無人さゆえに、凍矢はついに天神流を破門された……

それから一年が経った……
武と瑠奈は阿の山と呼ばれる所で修行していた。
天神流には道場がなく、この山は代々天神流の者が山ごもりの場として利用されてきた山である。

その頃、月形家に一人の男が現れた！
「お久しぶりです……良昭先生。」
「何しに来た？凍矢！」
「瑠奈を俺の嫁にしようと思いまして……」

「たわけたことを、いいか、瑠奈は武と結婚させるつもりじゃ。」
「そうおっしゃると思いましたよ。」
そういいながらニヤリと笑った。
「ならば、先生と武を殺さなくてはなりませんね！？」

そして死闘が始まった
だが、さすがの凍矢も良昭には勝てそうもなかった。
「（クソ、やはり今の俺では勝てんか？）」
「許せ、凍矢よ…今楽にしてやる。そして、ワシもお前の後を追う……」
良昭が、凍矢にとどめを刺そうとした……
だがその時！
「う、うう～、こんな時に発作が……」
なんと良昭は、胸を病んでいた。
「これは、これは……なんとも……まさか病んでいたとは……安心してください先生、今楽にして差し上げます。」
そして良昭は……
「次は武だ！」

その頃瑠奈と武は……
「瑠奈そろそろ山を降りよう、先生も待っておられるだろうし……」

「そうね」
「……瑠奈、来年になったら、結婚しよう」
「……うれしい、すごくうれしい」
二人はそのまま熱い口づけをした……

その時！
「やはり、ここにいたか」
「凍矢！何しに来た？」

武は冷や汗を掻いた。
「瑠奈を俺の女にするためさ！」
「私は、あんたの女になる気はない」
「いい事を教えてやろう。瑠奈、お前の父良昭は俺が殺してやった」
「嘘を言うな！」
「嘘ではない、お前らも気づいてたんだろう！？あの男が胸を病んでいたことを……感謝してもらいたいもんだ。どうせ早かれ遅かれあの男の死期は近かったに違いない、だが俺のおかげで、病死ではなく戦死したんだからな。」
「凍矢、なんて事を……」
武が構えた。
「次はお前だ！」
凍矢が攻撃をしかけた。
二人の実力は互角だった。
この戦いを当時の瑠奈には止める事ができなかった。
「やるな～、武！」
「（すまん瑠奈、お前だけでも生きて……そして幸せになってくれ）」
武は死を覚悟し、凍矢と共にガケから転落した。
すぐさま瑠奈は、ガケを駆け下り、武の所に……
「しっかりして、武！」
「す、すまん……瑠奈……ハアハア……だが、お、お前だけは、幸せになって……」
武はついに息耐えた……
だが！
「ハアハア……く、くそが！」
なんと、凍矢はまだ生きていた！
「凍矢！」
瑠奈は父と武の仇を討とうとしたが、凍矢の凍りつく目に瑠奈は、

金縛り状態におちいった。
「ど、どうした？い、今のうちに、俺を殺しておかないと、後悔……
するぜ！？」
ついに瑠奈は、動く事が出来ず凍矢を逃がしてしまった……
やがて、瑠奈は、天神流の後継者となり、ただひたすら強くなろうとしていた……
そして、裏の世界に足を踏み入れた。
すでに、瑠奈の強さは、格闘王はもちろん、父良昭をも超えていた。
瑠奈は裏の世界で、何人もの人間を殺めてきた……
ほとんどが人間のクズばかり……
だが中には、本物の戦士とも命をかけ戦った事も何度かある。
初めて、瑠奈が殺した相手は、ただの通り魔だった……
ある日、一人のＯＬが帰宅途中に殺された。
それから、三日後に今度は女子大生がバイトの帰りに殺された。
犯人は同一犯と思われるが、どうも金銭目当てではないらしい。それは殺された二人から財布などを盗んだ形跡がないからだ。
そして五日後の夜……
「お、お願いです。お金ならあげます。」
「へへへっ、お前、新聞読んでないのか？おれは、金なんかいらねぇよ。」
「も、もしかして、あなたが、あの通り魔！？」
「そうだ。俺が最近ＯＬと女子大生を殺した男だ！」
「あ、あなたの目的は何？」
「俺の目的は、恐怖に怯える女の顔を見ながら、ゆっくりと殺

すことだ。」
男は無職で、名は宮下勉（37）で人間のクズのクズだ。
「（お願い、誰か助けて！）」
女は恐怖のあまり、逃げることも出来ず、やがて、声すら出せなくなった。
「ついに声まで出ないくらいに怖いか？今からこの包丁でゆっくりと殺してやるよ。」
その時！
「今日、死ぬのはお前だよ。」
「なんだ！？誰だ、おまえは？」
「私は、始末屋（スイーパー）……お前を殺しに来た！」
瑠奈だ！瑠奈がついに現れた！
そして震えている女性の近くに行き、彼女を守るとした。
「へへへっ、それにしても美しい女だ。まずはお前を、ゆっくりと殺してやるよ。」
「もう大丈夫よ。今のうちに逃げなさい。」
女は、瑠奈のやさしい顔を見たら安心し、そして、ゆっくりと歩き始めた。
その時、男が瑠奈に襲いかかった！
だが瑠奈の天誅が炸裂！
さらに瑠奈は、男が気絶しない程度で攻撃を続けた。
女は瑠奈を信じ、無事逃げることができた。
男は再び包丁で襲いかかるが、瑠奈は男の手首を蹴り、その勢いで包丁は男の腹に突き刺さった。
「血、血が……い、痛いよ…お願いだ、助けてくれ。」
「無理ね。あんたは、そのまま、苦しみながら死んでいくのよ。」
そう言って、瑠奈は去っていった……
「（スイーパーか……所詮天神流は、人殺しの技、今の私にはちょうどいいかも）」

こうして瑠奈は、スイーパーとなり、後に裏の世界でアルテミスと呼ばれ、多くの人達から恐れられるようになっていく……

「た、頼む、救急車を……」

その翌日、すでに男は死んでいた。

発見者がすぐに、警察に連絡した。警察はこの男が通り魔だと分かった。

そして、包丁には瑠奈の指紋が無いため、この男は自殺したことになっている。

それから半年後、ちょうど武が亡くなって、一年が経った頃……

北斗は自分の思いを瑠奈に告げた。

そして、一ヶ月後……

「どうしたの？北斗」

「……瑠奈、俺ではお前を幸せすることが出来んみたいだ。お前の心の中にはまだ、武が生きている」

「……ごめん北斗、でもあなたに告白されてうれしかった。だから……」

そして二人は、恋人からまた友達という関係にもどっていった。

それから数日後、ジュンジとユウヤの前に北斗とランが現れた。

「この前の解散ギグ観たぜ。短当直用に言う。俺達と音楽（ロック）をやらないか？」

「何で俺達が、てめえらなんかと……絶対にヤダ！」

ユウヤは嫌がっていたが、ジュンジは、考えていた。

「北斗、俺もこいつらといっしょにやりたくねえよ～」

するとジュンジが、

「お前らにとって、音楽（ロック）とはなんだ？」

「貴重な宝だ！」

と、北斗が言うと、ジュンジはニヤリと笑い、そしてプレシャスが結成された！

さらに時は流れて、瑠奈は二十歳（ハタチ）になっていた……

その頃、龍一は、上級生や中学生までマジって、堤防でいじめられていた。その中には、あのマサシもいた。

「お願い、やめてよ」

「龍一！俺達はお前のためにやってるんだぜ。」

「お前は、格闘王の子供のくせに弱いから、俺達が鍛えてやってるんじゃないか。」

「明日までに、授業料五万持って来い！」

そう言ってヤツらは去っていった……

次の日、龍一はお金を持ってこなかった。

そのため、また堤防に連れられ、ボコボコにされた後、真冬の中、川に投げられた。

「ゲホッ……ゲホッ……！」

龍一は自力で岸に上がった・・

「お前が悪いんだろう！金もってこねえから」

さらにリンチが続いた。

だがその時！

「確かに、悪い子にはお仕置きが必要ね。」

瑠奈が笑いながらそうつぶやいた。

「綺麗な姉ちゃんだな～俺達の仲間になりたのか？」

と次の瞬間いじめっ子達はあっという間に瑠奈にお仕置きされて、そして一目散に逃げていった！

龍一の体は、ビショビショに濡れていた上に、泥だらけであった……

そして泣きながら、

「もう嫌だ！もう死にたいよ！」

とつぶやいた……
すると瑠奈は、
「死ねば！早く死んで見せてよ。一人で出来ないなら手伝ってあげようか？」
そう冷たく言い更にナイフを取り出した。
すると龍一は、
「……本当は死にたくない、本当は死ぬのが怖い……」
すると瑠奈は、ナイフを置き、濡れて泥だらけの龍一をそっと抱きしめた……
「（温かい……そしてすごくいい匂いがする。）」
龍一は照れながらそう思った・・
「そうよ、死んだらそれで終わりなのよ。もう二度とそんな事を言ってはダメだからね」
「僕、強くなりたい！お父さんみたいに……」
「……努力すれば、強くなれるわよ」
こうして、龍一は瑠奈の弟子となり、純粋に強さを求めていった……

しばらくして、瑠奈はヴァイオリンを弾き始めた。

実は昔、瑠奈もプレシャスのメンバーでヴァイオリンを担当していたのだ。
やがて龍一に、天神流を教えるため脱退した。
プレシャスは、その後解散をしたが、三年後に、再び活動を開始した。

そして、二年後には、インディーズバンドとして、アルバム「ファンタジア」をリリースした。
アルバムの最後の曲に、瑠奈も参加して、ヴァイオリンを弾いている。

瑠奈は父から天神流を学び、母からヴァイオリンを学んでいたのだ。
瑠奈は、南や武そして、父と母のためにヴァイオリンを弾いていたのであった……

第４章　瑠奈の過去（後書き）

キャラデータ

小林秀一・・・小野寺清の弟子で、少林寺拳法の達人。
文武両道でルックスもよく、恵みという彼女がいる。

岡村徹・・・暴走族、摩利支天の元特攻隊長でボクシングをやっているヤンキー。
龍一とは中学時代からの仲間である。恋人は事故死した南だ。

第5章　龍一と瑠奈（前書き）

第5章で龍一と瑠奈は一つになります^^
18禁のため、こちらに載せれなかった話を、18禁で載せました。
http://ncode.syosetu.com/n6306g/
もし良かったら読んでください（^0^）18未満の方はスイマセン><

第5章　龍一と瑠奈

南が亡くなって、二週間が経った……
この間に秀一は退院をしていた。

ある日、瑠奈の店に一人の男が現れた。
「へ～、なかなかいい店じゃん。」
「光介！」
店に来たのは、新戦会の四天王の一人、原田光介だ。
「南ちゃんの葬式の時、お前や北斗と久しぶりに会ったけど、あの時は話かけづらかったから何も言はなかったけど、今日来たのは、お前に頼みがあって来た。」
「頼み？」
「とりあえず、コーヒーを……」
しばらくして、瑠奈がコーヒーを出した。
「うまい」
「それで、頼みって何？」
「俺が、空手を学んでいたのは知っているよな？」
「ええ……でもまだ続けているの？」
「ああ、けど最近、面白いヤツがうちの道場に入門してきた。」
「面白いヤツ？」
「あの伝説の格闘王の子供だよ。」
「……！」
「しかし厄介なことに、とんでもなく強い！が、俺は指導員である以上指導しなきゃならん、だが、あんな化け物をどう指導していいか分からん……そこで館長や他の幹部と相談して、お前の弟子に戻せばいいと思って、頼みに来た。」
「まさかお前が、新戦会の人間だったとは……」

「あいつは本気(マジ)で、おまえに惚れている……いやお前自身も、龍一に惚れてるんじゃないのか？」
「この前、北斗が私にこう言った……お前の心は今、揺れて揺れて、揺れ動いている……だが、龍一を愛しているから、自分に近づけないようにしている……それは愛しすぎるから……そう言っていた。」
「あいつらしいなぁ」
「あいつに会ったら、店に来るように伝えてよ。」
「分かった、今日道場で会ったら伝えとくよ。」

次の日の夜、店が終わる頃に、龍一は現れた。
「……ルナさん、僕……」
「リュウ、百万払ってくれたら、アンタの彼女になってもいいわ。」
「……」
「私はこういう女なのよ。」
すると龍一は、そっと瑠奈を抱きしめた。
「初めて、ルナさんに会った時、泥だらけの僕を、こうやって抱きしめてくれた……」
「……私にこんな事をして、ただで済むと思っているの？」
「僕は、ルナさんになら、殴られても、殺されてもかまわない……」
だが龍一の体は震えていた。
それは龍一が、瑠奈のやさしさと同時に、恐ろしさもよく知っているからだ。
そして龍一は、覚悟を決め、震えながら目を閉じた……
「（リュウ、お前はホントに馬鹿な男だよ。）」
すると瑠奈は、龍一に優しくキスをした。
龍一にとっては、はじめてのキスだった。

「（……ルナさん……）ルナさん、ぼ、僕と付き合って下さい！」
「……リュウ、ゴメン、今の私は、誰とも付き合いたいと思えないの。でもすごくうれしいよ。」
「……な、ならもう一度、僕を弟子にして下さい！」
瑠奈は微笑みながら、
「うん、それならいいわ」
と、返事をした。

こうして、龍一は再び瑠奈の弟子にもどる事ができたのである。
そして、その夜、二人は一つとなった……

「マジだぜ！？マジ！俺見たもん。龍一と瑠奈さんが手をつないで歩いていたんだ。」
「確かに、龍一君は最近、様子がおかしい……」
「やはり二人は、付き合っているのかしら？」
学校の中で、舞と一と四郎がうわさ話をしていると、龍一が登校してきた。
「みんな、おはよう。」
「お前、瑠奈さんと付き合っているのか？」
「まさか、まだ師弟という関係だよ。それより僕、学校を辞めるつもりなんだ。」
「龍ちゃん本気！？」
「うん。本気！けどチャランポランな理由で辞めるんじゃないんだ。自分の夢……最強の格闘家になると言う夢のためさ。」
「だからって、辞めなくても……」
「何となくと言う理由で、高校に入ったが、学校で学ぶ事は何もない。だったら辞めて、その時間を利用して、天神流の修行をしたい。」
彼の目は本気であった。
「来週から一年間、阿の山に一人でこもって、修行に励むつもり

なんだ。このことは、ルナさんや親には話してある。後は、担任の先生に言うだけ」
「龍一君は、本気みたいだねぇ。」
「うん。でも、高校に入って嬉しかったことは、3人に出会えたことかな。」

昼休み、龍一は図書室にいた。
彼は本を読むのが大好きだ。漫画や小説、さらには絵本など様々な本を読む。
龍一の姿を見かけ、舞たち3人も図書室に入っていた。
「龍ちゃん、何の本を読んでいるの？」
「今読んでいるのは、宮本武蔵の本だよ。あの武王大山倍達は、山ごもり時代宮本武蔵を心の師としている。だから、どんな人か知りたいんだ。それに、お父さんと同じ名前だし……おじいちゃんは、お父さんに宮本武蔵のような兵になってほしくて、付けたみたい」
「俺は本なんて、漫画しか読まないからなぁ……」
四郎はそう言いながら、一冊の本を手に取った。
彼が選んだ本は、「姿三四郎」だ。

明治時代、柔道家三四郎が、様々な格闘家達と闘っていくというお話だ。
そして、彼の必殺技といえば、あの山嵐だ！
この姿三四郎のモデルとなった人物は、あの講道館の嘉納治五郎の門下生、西郷四郎である。
「（もし、この山嵐が出来たら、龍一に勝てるかも……）」
四郎も彼なりに、強さを求めていた。
昼休みが終わり、龍一達は教室に戻っていた。
帰宅途中、龍一達四人は、新戦会の土方と原田に出会った。

そして、原田が龍一に話しかけた。
「龍一、瑠奈とはその後うまくやっているかい？」
「はい！」
「俺達は今から、瑠奈の店に行くんだ。土方さんが瑠奈に会ってみたいと言うんで……お前らもこいよ。」
こうして、みんなで瑠奈の店に向かった……

瑠奈の店に入ると、そこには北斗とランがいた。
そして、北斗が土方に向かって、
「ト、トシさん？」
「北斗？北斗か！」
「北斗さん、土方さんを知っているんですか？」
「ああ、俺の憧れの、ヴォーカリストだった人だ。」
「そういえば、私が小さい時、土方さん、派手な格好で音楽をやっていましたねぇ」
「そうか、お前は、音楽で土方さんに憧れていたのか……」
「光介、お前、まだ空手をやっていたのか！？俺は、格闘技ならボクシングが好きだな」
「音楽か……もう十年くらい昔の事だなぁ。それはそうと、あなたが龍一の師匠、月形　瑠奈さんですね？」
「ええ、お久しぶりです。土方さん。」
「……！ああ、何処かで見たことがあると思ったら、貴女もプレシャスのメンバーでしたよね？」
「はい、でも今は違いますけど……」
「まあ、音楽の話は置いといて、実は今日来たのは貴女と試合をしたいと思いまして……」
「土方さん！何を……」
「舞ちゃん、土方さんは本気だ。」
「原田さん！でも、お父さんの……館長の許可なく、正当な理由もない他流試合は禁止されています！」

「館長から、許可はもらっています。」
「土方さん、私は武道家ではありません。」
「知っています。裏ではアルテミスと呼ばれている、プロのスイーパーらしいですね。」
「……」
しばらく沈黙が続いた……
そして……
「武士道とは死ぬことと見つけたり……俺は戦う時は、常に死ぬ覚悟で戦っています。貴女のようにね。」
「分かりました。明日の夜、そちらの道場にお伺いします。」
「では、ルールは喧嘩ルールで、勝敗は負けを認めるか、相手が立てなくなるまで、もちろん武器を使ってもいいですよ。では明日お待ちしています。」

そして、次の日の夜……
道場には、新戦会の一般の部の門下生や四郎、秀一、恵、トオル、北斗、ラン達が集まった。
「瑠奈さんと龍一は、まだ来てないみたいだなぁ」
「時間の指定はしてないし、瑠奈さんは店があるからねぇ」
「それより原田さんが持っているの、真剣じゃ……本気で殺し合いでもする気なのか！？」

そして……
「お待たせしました。」
瑠奈と龍一が、天神流の道着を着て現れた。
「私が、館長の後藤　勇です。」
「月形　瑠奈です。」
「おい、すごい美人だな。」
「ああ、でも本当に強いのかなぁ？」
「原田先輩、あの人本当に強いのですか？」

「あの女がどれほど強いか、もうすぐ分かる。だから黙って見ていろ。」
「押忍！」
「永倉！」
「押忍！館長！・・・では、正面に礼！互いに礼！始め！」
ついに二人の試合が始まった。
土方がまず、回し蹴りを……
だが瑠奈は紙一重でかわた。
更に、土方の攻撃が続くが、瑠奈はすべてかわす。
「さすがに強いなぁ……」
今度は瑠奈が攻撃を……
だが土方もかわし、かかと落としを……瑠奈は避けて、そして、天誅が炸裂し、土方を蹴り飛ばした！
土方は壁の方までふっ飛んだ。
更に手裏剣を投げたが、わざと外した。
「降参したらどう！？次は、ほんとに当てるわよ。」
「やはり空手家の土方では勝てぬか……ならば、鬼の土方ならどうだ！」
土方の顔つきが変わり、ついに鬼と化した。
「原田！」
「押忍！」
原田が土方に、刀を投げ渡した。
「あんたが武道家でない様に、今の俺も空手家じゃない！」
土方がついに刀を抜いた。
「行くぜ！」
鬼の土方の攻撃が始まった。
土方の剣術は我流だが、かなりの腕前であった……
今度は、本当にかわすのが精一杯で、瑠奈はなかなか攻撃が出来ない。
「す、すごい……強いよ！土方さん……あのルナさんがかわすの

が精一杯なんて……」
そして、土方は得意の突きを出したが、これも瑠奈はかわす。
「なるほど、これが鬼の土方の強さね……なら私も、アルテミスとして戦うわ。」
土方の攻撃は止まらない、瑠奈の頭に刀が……
だが瑠奈は白刃取りをして、そして、刀を折った。
だがそれと同時に、土方は瑠奈の鳩尾に蹴りを放っていた。
さらに折れた刀で突きを、だが瑠奈は、かわし双龍が炸裂！
そして、龍神を使った。
「（何だ、この技は……？）」
土方は、立ち上がることが出来なくなった。
「ま、まさか殺した！？」
すると瑠奈が笑顔で、
「また彼と戦いは……」
と答えた。
土方は気を失っているが、生きていた。
「（恐ろしい女じゃ……あのトシを倒すとは、ワシもあと十年若ければ、あの女と戦ってみたいと思ったかも……）」
「（いつか、ルナさんを超えてみせる……）」
龍一は、心にそう誓った。

第5章　龍一と瑠奈（後書き）

キャラデータ

大河虎次郎・・・龍一の永遠のライバルで、ただ一人、実践を積んで強くなった男。

名前の読みはたいがこじろうで、おおかわとらじろうなどと言ったら殺されるだろう。

第6章　龍一の過去（其の一 修羅誕生）

土方と瑠奈の戦いから一週間後……
すでに龍一は、学校を自主退学していた。
彼の担任は、止めるどころか、やっと一人、問題児が消え喜んでいた。

「緒方先生、また一人、うちの学校のクズが消えて良かったですね。」
「まったくですよ。あのクズ、父親があの格闘王だから、自分も強くなれると思っているんでしょう。」
その話を聞いていた女教師が、二人に文句を言い始めた。
「緒方先生、藤田先生、神威君はクズじゃありません。」
「早乙女先生は、あまいんですよ。あいつは、遅刻はするは、授業中は居眠りしているはで、問題児以外の何者でもありませんよ。」
「それだけで、あの子をクズと言うのですか！？」
「あいつは、普段おとなしくしているけど、裏では何をやっているかわかりませんよ。」
「そうです。どうせ影で、シンナーを吸っていたり、イジメをしたり、ホント何をやっているか分かりませんよ。」
「お二人が、そういう人だということが、よくわかりました。」
そう言って早乙女先生は、席に戻っていった。
「後は、嘉納　四郎も辞めてくれれば、嬉しいのだが……」

その頃、舞達は……
「なんか、龍ちゃんがいないとさびしいねぇ。」
「確かに今日一日、なんか物足りなかったなぁ」

「そうだね。しかも龍一君、明後日から一年間、山ごもりでいなくなるしねぇ」
「まあ、あいつが決めた事だ。それより、そろそろ帰ろうぜ」
その頃、龍一は、家で自分の過去を思い出していた。
今から十六年前……
一九九〇年五月二十日に、神威　龍一は、名古屋で生まれた。
そしてこの年に、伝説の格闘王が、格闘家を引退する。
三歳の頃になると、武道の変わりに、ピアノを習っていた。龍一は、両親からかなり甘やかされて育てられた。
そして、月日が流れ……
小学４年生の時、龍一はいじめられていた。
彼は毎日、毎日、上級生や中学生までマジっていじめられていた。
だがその年の、十二月一日に、龍一は、瑠奈に助けられ、そして弟子となる。
龍一は、瑠奈の弟子となってからは、学校に行かず、天神流の修行に励んだ。
「もっと腰に、力を入れて」
「ハアハア……は、はい」
龍一は、力強く蹴った。
「ダメダメ、こう蹴るのよ。」
バシッ！
瑠奈の蹴りが、龍一に決まり、龍一は一瞬体制を崩した。
瑠奈は、もちろん手加減をしたが、今まで甘やかされてきたため、龍一は今にも泣きそうな顔をしていた。

「まあ、今日はこれくらいにしましょう。」
龍一は、涙をこらえて、
「あ、ありがとうございました。」
そう言うと、瑠奈が近くに来て、龍一の怪我を診た。
「大丈夫みたいね。」
龍一の顔が赤くなった。
「（ホント、ルナさんって、美人だなぁ……こんな人が、将来お嫁さんになってくれたらうれしいなぁ）」
この頃から龍一は、瑠奈に憧れていた。

やがて、龍一も中学生になっていた。
龍一は、小学校の卒業式はもちろん、中学校の入学式にも出てこなかった。

だが、中一の秋に、龍一は派手に金髪に染め、二時間目の途中に登校してきた。

龍一が、通っていた白川中学は、昔から有名な不良学校で、虎次郎やトオル、南達もこの学校に通っていた。

また、あの瑠奈や北斗達もこの学校の出身である。
だが、十年も時が経っているので、瑠奈達を知っている教師はいなかった。

龍一が、ドアを開け、初めて教室に入る。
「おい、あれ龍一か？」
「マジ！？どうしたんだ！？アイツ。」
生徒が騒ぎ始めた。
今の時間、龍一のクラスは社会の授業をしていた。
「き、君が、神威君か！？」

社会科の教師は、震えながら、龍一に話しかけようとしたが、龍一は勝手に空いている席に座り、そのまま腕を組んで眠り始めた……

二時間目の授業が終わり、休み時間の時、二人のヤンキーが龍一の席に近づいてきた。

「おい、起きろ！」

「テメェ～、なんだ、そのカッコウは……」

「なんだ、お前らか……」

実はこの二人、昔上級生たちといっしょに、龍一をイジメていた二人だ。

「雑魚に用はない。消えろ」

二人は完全に切れた。

「……まあ、強くなるためには、実戦も必要か……」

そういって、龍一は立ち上がった。

一人が殴りかかろうとした瞬間……

バキッ！

と教室中に鳴り響き、龍一の正券突きが決まった。

もう一人は、龍一の後ろを取ろうとしたが、結局、龍一の裏拳が決まった。

「龍一君！」

一人の女子生徒が、龍一に話しかけた。

「静か……」

彼女の名は、星野静で、ルックスも良く、成績も優秀でクラスのアイドル的存在だ。

「いったい、どうしたの？」

「お前には関係ない。俺はこれから、修羅となり強くなる。」

「ク、クソ餓鬼が……」

裏券を喰らった生徒は、ポタポタと鼻から血を流していた。
「おい、虎次郎は来てないのか？」
「き、来てねーよ」
「そうか……」

チャイムが鳴り、三時間目の授業が始まろうとした頃、龍一は教室を出た。
「おい、あれがホントに龍一か！？」
「ムチャ強え～」

その頃龍一は、屋上で一服していた。
「（修羅か……いいだろう今日から俺は喧嘩屋だ！）」

昼休み、龍一は三年のとこに来た。
「お、おい、あれ一年坊か！？」
「それにしても、なんて目をしてんだ。」
「（チッ、強そうなヤツはいないのか）」
その時、教室から、泣き叫ぶ声が聞こえた。

「い、痛い……も……もう、やめて下さい。」
「お、おい、助けてやれよ。」
「馬鹿、お前が行けよ。」
「おい、ズボンとパンツ脱がせ！」
「や、やめて！」
その時！
「おい、まだ弱い者イジメをしているのか？マサシ！」
「誰だ！」
「昔、お前にいじめられた、神威だよ。」
「ああ、お前か……それにしても、あの泣き虫野郎が、ずいぶん派手な頭をしているなぁ」

マサシは、いじめていた少年を蹴っ飛ばした。
そして、龍一に攻撃を……
だが、一瞬のうちに上に跳び、そして龍一の天誅が決まった。
更に龍一の攻撃が続く……
その時！
「おい、一年坊、そのくらいにしな。」
「ああ！？誰だ、テメェー」
「俺は岡村トオル」
この時、龍一とトオルは初めて顔を合わす。
トオルは中学二年の夏に、この学校の転校してきたため、龍一の事を知らないのだ。
また、転校してしばらくしてから、南の兄北斗と同じボクシングジムに三年間通っていた。

「俺の名は、神威龍一……アンタ、強そうだな」
龍一は拳を強く握り、トオルに喧嘩を売ろうとしたが、トオルは、
「俺に、喧嘩を売ろうとしてもだめだぜ。俺は、無意味な喧嘩は嫌いなんだ」
「無意味な喧嘩！？トオル、こいつは三年に喧嘩を売ってきたんだぜ」
「ああ？てめぇ、またイジメをしてたな！？」
トオルの顔つきが変わった。
「（何だ！？コイツも俺と同じで、イジメをしているヤツが気に入らないのか！？）」
その時、龍一に一人の女子生徒が話しかけてきた。
「ちょっと龍一、私の彼氏に手を出さないでよ」
「南か……いい彼氏だな」
そう言って、龍一は教室を出た。
「南、もしかして、あいつが伝説の格闘王の息子か！？」
「ええ、そうよ」

「なかなか面白そうなヤツだ……」
トオルは嬉しくなり、龍一のクラスへ向かった。
龍一が、自分の教室に戻ると、さっきの二人のヤンキーが再び龍一に喧嘩を売ってきた。
「しつこいぜ、お前ら……」
龍一が攻撃をしようとした時、
「お前、ホント喧嘩が好きなんだな！？」
トオルが、龍一のクラスにやってきた。
「なんだ……？俺と喧嘩するきになったか？」
「いいや、俺はお前が気に入った」
「……！」
「どうだ、俺とダチにならねぇ？」
「ダチだと！？」
龍一は今まで、友達なんていなかったから、少し動揺していた。
そして、
「お前は、南の彼氏だし、俺もお前が気に入った……」
龍一は少し照れながら、返事を返した。

「お、おい、やばいぜ」
「ああ、トオルさんが出てくるとは……」
こうして龍一は、初めて友達と呼べる存在が出来た。

龍一は、それから毎日のように喧嘩をするようになった。
だが、龍一が喧嘩屋として喧嘩を売る相手は、自分が強いと認めた相手とイジメをしているヤツだ。
また、売られた喧嘩は必ず買っていた。
しかも、この時の龍一は手加減を知らない。
特に虎次郎とのタイマンは、瑠奈以外に、止める事が出来なかった……

初めて、虎次郎とタイマンをハったのは、龍一が喧嘩屋になって三ヵ月後だった。

ある土曜の午後……

龍一は、公園のベンチに座っていた。

その姿を、六歳くらいの女の子が眺めていた。もちろん龍一は、この視線に気づいていた。

龍一は、タバコに火を点け、そして微笑んだ。

すると、少女が話しかけてきた。

「お兄ちゃんは外人さん？」

「いいや、金髪に染めているんだよ。」

「なんか女の人みたい」

その時！

「あっ、兄ちゃん！」

「龍之介……」

「この人、龍之介君のお兄ちゃん！？」

「そうだよ。すごく強いんだよ」

「でも女の人みたいで、全然強そうに見えない」

どうやら彼女は、龍之介の友達で、名前は花沢百合という。

龍之介と百合が仲良くお話をしていたら、

「中坊が、何派手に染めてんだよ」

高校生くらいのヤンキー五人が龍一に喧嘩を売ってきた。

公園にいた親子達は、急いでその場から離れた。

平和だった公園の中が、一瞬で修羅場となった。

「修羅に生き修羅に死ぬ……」

そう、龍一がつぶやいた。

そして、一瞬で五人のヤンキーを血祭りにした。

「お前ら、運がいいなぁ。弟達がいなかったら、こんな程度じゃ済まないぜ！？」
「パ、パツ金に女顔……こいつが修羅か！？」
「すごーい。龍之介君のお兄ちゃん、本当に強いんだ」

だがヤンキー達にも意地があった……
まだ龍一とやる気だ。
だがその時！
「最近、ずいぶんと暴れているみたいだなぁ！？」
龍一の表情が変わった……
「龍之介、彼女連れて、他の所で遊んで来い」
「えっ？う、うん……ユリちゃん、行こう」
二人もその場から離れた。
「やっと、テメェーと喧嘩ができるぜ！虎次郎」
だがその時、警察が現れた。
「お前ら、何をやっている！」
「おい、マッポまで来たぜ」
「ああ、やばいな……」
ヤンキー達も、その場を離れた。
「堤防で勝負だ」
「フン！」
虎次郎も、公園から離れた。
だが、龍一はその場から動かなかった。
「お前、中学生だろう。名前は？」
「……喧嘩屋修羅だ」
「ふざけてないで、質問に答えろ」
「さて、そろそろいいかな……」
龍一はタバコを銜えた。
「おい、未成年がタバコを吸っていいと思っているのか！」
「未成年？タバコ？あの二人は、シンナーを吸っているみたいだ

ぜ！？」
「なに！？」
警察が、後ろを振り向いた瞬間、龍一もその場を離れた。警察は後を追うが、龍一の速さに、ついて来られなかった。
龍一は、どうやら時間稼ぎをしていただけだった……
龍一が堤防に向かう途中、トオルと南に出会った。
「おい、そんなに慌ててどこに行く？」
「堤防で、虎次郎とタイマンだ。」
そう言って、堤防に向かった。
「……おい南、俺達も行くぞ！」
トオル達も堤防に向かった。

その頃堤防では、虎次郎が龍一を待っていた。

そして……
「待たせやがって」
「ああ！？誰のために、時間稼ぎをしてやったと思っているんだ！」
「行くぜ！」
ついに二人のタイマンが始まった。
先に攻撃を仕掛けたのは虎次郎だ。
バキッ！
と、音が鳴り響き、虎次郎のパンチが、龍一の顔面に直撃……
今度は龍一のローキックが、虎次郎こめかみに直撃した。
もの凄い激戦が続く……

トオル達が、堤防についた頃には、二人は血だらけになっていた……

さすがに止めたほうがいいと、トオルは思った。
だが、トオルでは、今の龍一と虎次郎を止める事が出来なかった。
二人の戦いは終わらない……
虎次郎が、隠していたナイフで攻撃を……
だがそれをかわし、龍一は手裏剣を投げたが、虎次郎もかわす。
しばらくしたら、静が現れた。
「龍一君、お願いだからやめて！」
「無理だぜ！？俺達でも止められないんだから……」
「そ、そうだ！兄貴の幼馴染の、瑠奈さんなら止められるかも！？」
「瑠奈さん！？」
「ええ、その人が、龍一に格闘技を教えているらしいのよ」
「お前、その人の場所分かるか？」
「ええ」
「よし、その人を連れて来てくれ」
「分かったわ」
南は、瑠奈の店に向かった……
龍一は、虎次郎のナイフを持っている手首をつかみ、鳩尾に蹴りを喰らわせ、そのまま関節を決め、投げて、喉めがけて、かかと落とし……天神流雷鳴だ！
「ぐは～」
虎次郎もこの攻撃で、かなりのダメージをくらった。
だが、龍一自身も、体力的にかなり限界がきていた。
その頃、やっと南は、瑠奈の店にたどり着いた。
「ハアハア……瑠奈さん、大変です！龍一が虎次郎と喧嘩して……ハアハア……」

「落ち着いて、言いたい事は分かったわ。二人の喧嘩を止めてほしいのね。」
「は、はい……て、堤防にいます」
「悪いけど店番をお願いね」
「え？は、はい……」

堤防では、まだ二人のタイマンが続いていた。
スピードと技は龍一、パワーと実戦経験は虎次郎だ。
虎次郎は、小学生の頃から、高校生や一般の大人と喧嘩をし、ほとんど負けた事ない男だ。だが、二人の強さ自体は互角だ。
後は体力勝負だ。
二人が攻撃をしようとしたその時！
「いい加減にやめな！」
瑠奈が現れた。
「ル、ルナさん……」
龍一の動きが止まった。
だが虎次郎の攻撃は、止まらない……
「そんなに喧嘩がしたいなら、私が相手をしてあげる」
「上等だー！」
虎次郎は、瑠奈に攻撃を仕掛けた。
だが、鳩尾に瑠奈の前蹴りが決まり、一撃で虎次郎は立てなくなった……
「く、くそったれ～……こ、この俺が、女なんかに……龍一に、そして女、必ずお前らをぶっ殺す！」
虎次郎はフラフラな状態で去っていった。
「す、すごい……いくら龍一との戦いで、血だらけになっているとはいえ、あの虎次郎を一撃で……瑠奈さんか……そういえば、北斗さんから、あの人の伝説を聞いたことがあったな……」
「リュウ、帰るよ。」
「は、はい……トオル、お前も来いよ」

「あ、ああ……」

それから後に、何度も虎次郎と戦うが、この時のように瑠奈が止めたり、勝負がついたかと思えば、二人ともダウンして立てなかったりして、勝負は龍一が、高校に入ってからも、つかなかった……

第7章　龍一の過去（其の二恋愛）

次の日、龍一は久々に、学校に登校した。
だがすでに昼休みだ。
後ろから静が、龍一に声をかけてきた。
「昨日はすごかったね」
「あの時、ルナさんが止めに入らなければ、勝っていたぜ！」
「龍一君、昨日の人が好きなの？」
「お前には、関係ない」
「……私、龍一君の事が好きなの……だから……」
「やめておけ、生きてる世界が違う……それにお前の言うとおり、俺はルナさんが好きだ。」
「そう……そうよね……でも、自分の気持ちが、伝えられたから、なんかスッキリした」
「お前にはいつか、いい男が現れるさ」
「だといいんだけどね……」
その時、龍一のクラスメートが現れた。
「龍一君、ちょうど良かった。ミツオが、マサシさん達に連れて行かれた」
「何！？場所は？」
「たぶん体育館裏……」
野田光夫……龍一と同じクラスで、目立たない存在のため、龍一の変わりにイジメられている少年だ。
龍一はすぐに、体育館裏に向かった……
体育館の裏では、ミツオがマサシ達にイジメられていた。
「さっきクソ踏んじまった。ミツオ舐めろ！」

「やめて……」
「逆らうのか！？」
マサシ達は、ミツオをボコボコにした。
「逆らった罰だ！明日までに、五万持って来い」
「てめーら、何してんだ！？」
「りゅ、龍一……」
「上等だよ！？てめーら……」
龍一は一瞬で、マサシ達を血祭りにした。
もはや、その辺のやんキーたちでは、龍一に勝つどころか、攻撃すら出来ない……
「てめーら、これから俺とミツオには、敬語で話せよ！」
「は、はい……」

しばらくして、静が現れた。
「ミツオ君、大丈夫？」
「う、うん……」
「一応、保健室に行こう」
「（情けない……憧れの静さんに、こんな姿を見られるとは……）」

どうやらミツオは、静に恋をしているようだ。龍一は、それに気づいた。
「俺が保健室に、連れてくよ……もうすぐ授業が始まるから、お前は教室に戻れ」
「えっ？じゃ、じゃあ、お願い……」

龍一は、ミツオを連れて、保健室に向かった。
その途中、龍一がミツオに尋ねた。
「お前、静の事が好きだろう？」
「……う、うん……でも静さんは、龍一君の事が……」

「俺には好きな人がいるんで、コクられたが、断った」
「えっ？そ、そうなんだ」
「お前は、静が好きで、静は俺の事が、俺はある女性が好きで、その女は亡くなった恋人の事が忘れられないみたいで……恋愛って難しいなぁ」
「う、うん」

授業が終わり、静は同じクラスの、女子生徒達と帰宅した。
だが途中、静達は三人のヤンキー達に絡まれた。
「どこの学校？」
「俺達と楽しもうぜ」
すると静は、
「皆、逃げて」
「え？そんな事出来ないよ」
「そうだ、龍一君を呼んでくるよ」
他の女子生徒達は、龍一を呼びにいった。
「まあ、ブスはいいや、あんた一人で俺達を相手してくれれば……」
「くすっ、相手！？いいよ」
「物分りのいい女だ！」
その時、ミツオが近くで様子を見ていた。
「（ど、どうしよう……静さんが危ない！でも怖い……）」
ミツオは静を助けたいが、恐怖で動けなかった・・・
だが、自分の好きな人を助けたい、ミツオは勇気を振り絞って、静を助けに行った。
「や、やめろ！」
「ミツオ君！」
「なんだ、お前は？」
「し、静さんは、僕が守る！」
「おいおい、震えてるぜ！？」

ヤンキーの一人が、ミツオの顔面を殴った！

その頃、さっきの女子生徒が、龍一とトオルを発見！女子生徒達は、龍一とトオルに事情を話した。

「そうか、分かった、お前らは帰りな」

龍一とトオルは、静を助けに向かった。

だが、龍一は急ごうとしなかった。

「おい龍一、何のんびりしてんだよ！？」

「ああ、大丈夫だって、あいつは父親からテコンドーを学んでいる」

「で、でも、あの子は女だぜ」

「……しょうがねぇな……急ぐか！」

その頃、ミツオは、ヤンキー達からボコボコに殴られていた。

「ミツオ君、逃げて！」

「ぼ、僕、龍一君みたいに強くないけど、でも静さんを守りたい」

「ミツオ君……」

ミツオは、すでに限界だった。

「けっ、口だけヤローが、俺達に逆らうからこうなるんだ」

「おい、クズ共！ミツオ君は命がけで、私を守ってくれた……私はミツオ君みたいに優しくないわよ」

「し、静さん！？」

テコンドーは韓国の武術で、蹴り技を得意とし、そのために柔軟や身軽さが必要だ。

もちろん、他の武術でも柔軟や身軽さは必要だが、テコンドーはその二つを利用した蹴り技が多い。もちろん手技のほうが多いが、足を自由に使うため、足技が多いと思われているのだろう。

静は、一人のヤンキーにかかと落としをし、もう一人には、回し蹴

り、もう一人のヤンキーは、逃げようとしたが、とび蹴りが炸裂！
静は、三人のヤンキーを倒した。
だがその時、ヤンキーの仲間達が現れた！
しかも、八人もいる。
「オセェーと思ったら、こんな所にいたのか」
「直樹さん」
「何、女に負けてんだ！？」
「す、すいません……」
「でも直樹クン、いい女だぜ！」
「ああ」
「（十一人か……今の私じゃ無理……）」
「女のくせに強そうだな～。でも俺は、あの喧嘩屋修羅のダチなんだぜ！」
「……へー、あの修羅の友達なんだ！？彼、有名人よね。どんな感じの人なのかしら！？」
「金髪に染めてて、俺みたいにガタイがよくて、メチャ強えんだぜ」
「クスッ、金髪と、強いのは合っているけど、あなたみたいな体格はしてないわ」
「ああ！？」
その時、龍一とトオルがやっと到着した。
「なんだ！？ミツオまで居るじゃん！」
「なんだ、テメーは！？金髪に染めて、修羅のマネか？俺はその修羅のダチだからよ！」
次の瞬間、龍一は直樹の鳩尾に、蹴りを放った！
「ぐは～……ゲホッ、ゲホッ……」
「ああ！？俺はテメーなんかしらねぇぞ！」
「な、直樹クンが一発で……」
「おい、あのリーゼント野郎……白川中のトオルだ！」
「じゃ、じゃあ、あの金髪野郎が、本物の修羅！？」

「てめーら、よくもミツオを、ボコリにしてくれたな」
「龍一、俺にも遊ばせろ！」
数分後……
龍一とトオルは、ヤンキー達を血祭りにした。
「おいお前ら、今度はこの程度じゃ済まないからな！」
龍一のその言葉で、ヤンキー達は逃げて行った。
「ミツオ君、大丈夫！？」
「へ、平気だよ」
「トオル、行こうぜ！」
「ああ……」
龍一とトオルは、その場を離れた。
「ミツオ君、ごめんなさい。私、三人くらいなら、勝てると分かっていたけど……ミツオ君が、私を守ってくれたから、しばらく黙ってみていたの……でもすごく嬉しかった」
「……僕は、静さんの役に立ちたかったんだ。ぼ、僕、静さんが好きです！だから、付き合ってください！」
「ミツオ君……ありがとう。こんな私でいいなら喜んで……」
こうして、二人は恋人同士になった。
龍一は、「修羅参上」の特攻服を着て、相変わらず喧嘩に明け暮れていた。
だがこの時、真の強さが何かを彼は知らない……

第8章　龍一の過去（其の三真の強さ）

月日は流れ、龍一は二年生になっていた……

「わ、悪かった。も、もう、修羅（アンタ）には手を出さないから……許してくれ……」

「許してください！だろ！クズ共が……」

六人のヤンキー達が、血だらけになって、倒れていた。
その喧嘩を、一人の少年が震えながら見ていた。
その少年こそ、少林拳の使い手、小林秀一だ。
もちろん、その存在を龍一は気づいていた。
そして龍一は、秀一の近くに歩み寄った。
龍一は、相手が強ければ、ヤンキーであろうと、一般人だろうと、男女関係なく喧嘩を売る。
だが龍一は、嘲笑うかのように秀一の横を通り去っていった。
おそらく、龍一は秀一に、お前は強いが、「臆病者だ！」と言いたかったのであろう……
それは、秀一が龍一に、恐怖を感じ、震えていたからだ。
秀一は、震えながらタバコに火を点けた。
「（あれが、喧嘩屋修羅……）」

それから一週間後……

この日龍一は、あるモノを目覚めさせた。

龍一とトオル、南は、西村モータースに居た。
ここは、摩利支天の六代目、西村和也の実家だ。

「やっと、復活した」
「おう、どうだ！？龍一」
「あっ、カズヤさん、復活しましたよ！ルナさんが愛用していた単車（ニンジャ）が……」
この日、目覚めさせたのは、瑠奈がレディース時代から、二十（ハタチ）歳まで愛用していたカワサキの単車ニンジャだ。龍一が弟子になってからは、瑠奈も忙しくて、ずっと眠っていた単車……
それを、目覚めさせたのだ。
「けっ、単車には興味ネーとか言ってたくせに……」
「ああ、興味ないよ。だからトオル（お前）の単車（ＸＪ）にも興味ない。けど、この単車（ニンジャ）は、ルナさんが愛用していたから、特別なんだよ」
「問題は、中坊のお前が、コイツを乗りこなせるかだ」
龍一は、まだ中学生、当然単車の免許など持っていない。

「へへっ、ルナさんも同じことを言っていた。けど、ナポレオンじゃないが、俺の辞書に、不可能の文字は無い！」
そう言って、龍一は単車にまたがった。
「その辺軽く流したら、ルナさんの店に行くから……それではカズヤさん、失礼します！じゃあな南、トオル」
ヴォン！ヴォヴォオオン！
龍一は、その辺を流した後、ルナの店に向かった。

喫茶「ＬＵＮＡ」……

ギャババババーン！
龍一は瑠奈の店の前で、単車を止めた。

そして龍一は、店の中に入っていった。
「ルナさん、ニンジャ復活しましたよ」
「へー、ちゃんと乗ってこれたんだ」
「俺は、ルナさんの弟子ですから……」
「それより、さっき、アンタの母親から、電話があったわよ。」
「あっ、携帯の電源、切ったままだった」
「まあ、心配していたみたいだから、家に帰りな」
「は、はい……」
「あっ、単車は、置いてきな」
「はい……」
龍一は店を出て、家に戻った。

「おかえり、龍一」
「ルナさんの所に、電話したみたいだが、なんの用だ!?」
「さっき、学校の先生から連絡があって、あなた、今日も学校に、行かなかったの?」
「悪いかよ?」
「今から、学校に行って、午後からの授業には出なさい!」
「イヤだね」
「龍一、あなた、もう二年生なのよ。来年になったら……」
「うるせーな!俺の勝手だろう!」
その時、今に居た父武蔵が現れた!

武蔵は、格闘家を引退してからは、時代劇モノの小説を書いたりしていた。

「沙織、その馬鹿は、行きたくないって言っているんだ。ほっとけ」
「でも、あなた……龍一、お父さんだって、本当は心配しているのよ。もちろん、お母さんも、そして、先生方も、みんな、あなたの事を心配しているのよ。だから、わざわざお電話を……」

「先公が心配!?笑わせるぜ!そんなの立場上、しょうがなくやっているだけだ!影では、俺をクズ扱いしたりして……あいつらは皆、似非教師だ!表向きは、いい面しやがって、偽善者共が……」

パシッ!

母沙織が、龍一の頬を叩いた。彼を叩いたのは、これが初めてのことだった。

「クソババア!(あっ、涙……)」

沙織の目から、涙が流れた。

その時、武蔵が、

「龍一、庭に出ろ!てめーが、どれだけ弱いか教えてやる。」

「じょ、上等だ!」

武蔵と龍一は、庭に出た。

「龍一、本気で来い!」

「い、いいのか!?てめーは、引退して十四年も経っているんだぜ!?」

「舐められたもんだ……お前など、左手だけで十分だ!」

龍一が攻撃を仕掛けた!

だが、全部、紙一重でかわされている。龍一が跳んだ!天誅だ!

だが、これもかわされた。

「もう、おしまいか?」

そう言って、武蔵の左正券突きが炸裂した。

龍一はそのまま、塀のところまでふっ飛んだ。

ドゴーン!

「ぐはっ……く、くそ、なんて一撃だ」

「喧嘩屋?修羅?笑わせるぜ!?てめーは、弱いものを守って、正義の味方みたいな事をしているらしいが、ホントは、ただ喧嘩がしたいだけなんだろう!?てめー自身も、偽善者なんだよ!瑠奈は

お前に、何を教えているんだ？あの女も偽善者か？」
「俺の事を、どう言おうとかまわん……だが、ルナさんの事を悪く言うな！」
「だったら、弟子のてめーが、しっかりしろ！弟子の出来が悪いと、師匠も同じだと思われるだろう！」
「くっ……」
「俺は昔、瑠奈の父月形　良昭と戦って敗れたんだよ。テレビでも、俺は負けた事があるとコメントした」
武蔵は引退後、一度だけ敗北があるとコメントしたが、誰もその戦いを見たことがない。その時の戦いを見たのは、瑠奈、武、凍矢だけ……
そのため、誰も信用しなかった。
また、天神流や良昭の名前も出さなかった。
天神流は影に生きる武術……
だから、天神流の者でない人間が、天神流を語ってはいけない、武蔵はそう思ったから、名前を出さなかった。
もちろんマスコミから相手の名前は？と聞かれたが、武蔵は、
「本物の修羅と戦った」
と答えた。
「信じる、信じないは、人それぞれ」
それが最後のコメントだった。

「（親父が、良昭大先生と戦った！？しかも、親父が負けた！？そうか、それで引退したのか！？）」
龍一が、ようやく立ち上がった。
「どおした、偽善者ヤロー！もう、おしまいか？」
「くそー！いつか、てめーを超えてやる！」
龍一は、そのまま家を飛び出した。
「龍一！……あなた」

「ふん、あの馬鹿が、行く所は決まっている」
しばらくの間、龍一は歩きながら、自分の世界に入った。
「狂おしいほど、痛いのならば、すべてのモノを壊し、自らを修羅と化すことで、求めるモノを手に入れるため、戦い続ける」
龍一は、そうつぶやいた。
彼が求めるもの、それは強さ……
だが、今の彼は、喧嘩の強さしか求めていない。
「（どおすれば、親父を超えられるんだ）」
龍一が立ち止り、我に戻った。
しばらくして、彼が再び歩き始めた。
その時の龍一の顔は、まるで鬼のような表情をしていた。通行人達は皆、龍一と目を合わせないようにしていた。
その時、一人の男が龍一の肩にぶつかった。
「どこ見て歩いているんだ！？コラッ！」
龍一が大声で怒鳴った！
通行人達も、一瞬立ち止まったが、見て見ぬふりをし、再び歩き始めた。
「おっ、ワリーな～ボウズ。」
「ボウズだと！？今の俺は、機嫌が悪いんだ！喧嘩なら買ってやるぜ！」
「俺は空手家だ！素人を相手にする気はない」
この空手家こそ、元摩利支天のメンバーで、後に新戦会の四天王となる原田光介である。
だがこの時、お互いに相手が何者なのかを知らない。

そのため、龍一は、すでに原田と会っていた事を知らない。
この時出会ったのは、ただの空手家としか覚えていない。
原田も、この時出会ったのは、ただの悪餓鬼としか覚えていない。

「空手家!?上等だよ!?俺は強いぜ!」
「ふーん」
龍一は、完全に切れた!
「ぶっ殺す!」
「礼儀をしらんボウズだなあ……まあ、昔の俺も人の事言えないが……」
「構えろ!空手家ヤロー」
「いつまでも、お前と遊んでいる暇はない。じゃあな〜ボウズ」
原田が、背を向け、去ろうとした。
「逃げるのか!臆病者!」
原田が立ち止まり、振り返った。
そして、原田が上段回し蹴りを放った。
だが、紙一重のところで止めた。
「(やはり出来る・・あの爺さん)これでどっちが強いか、分かっただろう。次は本当に当てるぞ!」
「(み、見えなかった……)」
「ボウズ、強くなるためには、負ける事も必要だ。その悔しさをバネにもっと強くなれ!」
原田が、再び背を向けた。
「ああ、それからこの戦い、おれ自身も、お前の後ろに居る爺さんに、負けた」
そう言って原田は、去っていった。

「(後ろに居る、爺さん?)」
龍一が、後ろを振り向くと、そこには一人の老人が立っていた。
「ジジイ、いつから、おれの後ろに!?」

「ホッホッホッ、ワシの気配に気がつかなかったのか！？わしは、あの男が回し蹴りをする、ちょっと前に、お前さんの後ろに居ったかな」
「（いくら、あの空手家ヤローに、気をとられていたとはいえ、俺の背後を取るなんて……）」
「あの空手家、強いのう……じゃが、お前さんは未熟者じゃ！」
「なんだと！」
龍一が構えた。
「おいおい、こんな年寄りに、暴力を振るう気か？」
「てめー、ただのジジイじゃネーだろう！？」
「あの空手家が、お前さんには、勝ったが、わしには負けたと、言っておったじゃろう……あの回し蹴り、お前さんに対しての警告と同時に、わしへの挑戦でもあったんじゃ……お前さん、あの蹴り見えたか？」
「い、いや、見えなかった……」
「そうじゃろう……じゃが、わしは見えた。顔色一つ変えずになあ。だから、あの男は、負けを認めたんじゃ！」
「……」
「わしの弟子にも、お前さんみたいに喧嘩の強さしか知らんやつが居る……武道家にとって、本当の敵とは誰だと思う？」
「……自分より強い相手！？」
「いや、己自身じゃ！わしの弟子も、お前さんも、心が弱いんじゃ！」
「心が弱い！？」
「そうじゃ！お前さんの心は荒んでいる。そのためお前さんは、わしに背後をとられたんじゃ！もし、わしが悪人じゃったら、お前さんはどうなっていったかのう」
確かに、この老人が悪人だったら、龍一は殺されていただろう。
「まあ、あの男の言うとおり、悔しさをバネに強くなることじゃ」

「じーさん、あんた一体何者だ！？」
「わしの名は、小野寺清じゃ！お前さんは？」
「神威龍一だ！」
「神威！？お前さん、伝説の格闘王の息子か？」
「ああ、けど、俺は親父から武術を学んでいない……俺の師匠は、ルナさんだけだ」
「るな！？月形　瑠奈の事か？」
「ああ、ルナさんの事知っているのか？」
「知っておるぞ。確か天神流とかいう古武術の使い手で、アル何とかっていう殺し屋じゃろ！？」
「アルテミスだ！それに、殺し屋じゃネー、スイーパーだ！」
「ああ、そうじゃ、アルテミスじゃ……そう名乗っておったわ」
「（名乗って！？）じーさん、ルナさんに会った事があるのか？」
しばらく小野寺が黙りこんだ。
そして、小野寺が、再び語り始めた。
「5、6年くらい前に、チンピラ共が悪さをしておったので、少し懲らしめてやったんじゃ。」
「へー」
「じゃが、そうしたら、チンピラ共が、わしの命を狙い始めてのう」
「そうか、それでアンタはルナさんに、奴らを始末してくれと、依頼したんだな！？」
「いや、逆じゃ、依頼をしたのは、チンピラ共の方じゃ……そして、あの娘が現れたんじゃ」
「ば、馬鹿な！？ルナさんは、クズを始末するのが仕事、そんなクズ共の依頼を受けるもんか！」
確かに、小野寺が弱ければ、瑠奈は相手をしなかった事だろう。
だが、小野寺も昔は名のある武道家、天神流の技を振るうに、これ以上の相手だ。
だから、彼女は、チンピラ共の依頼を受けたのであろう。

「あの娘は、修羅そのものじゃった」

小野寺が、この時言った修羅とは、荒んだ者のことではなく、三面六臂の闘神阿修羅の
ことである。その表情は、怒り、悲しみ、意志を表している。
確かに瑠奈は、強い意志を持っている。そして、家族や武を失って、怒りと悲しみを心に秘めて生きている。

「わしは、お前の父、格闘王とは戦った事はないが、おそらくあの娘は、格闘王より強いじゃろう……さすがのわしも、何十年ぶりかに本気になった。さて、この勝負どっちが勝ったと思う？」

「ル、ルナさん！？」

「そう、そのとおり、勝ったのはあの娘で、わしは負けた……望みどおり、わしの命をやると言ったが、あの娘は、ただあなたと勝負したかっただけ……そう言って去っていった」

その後、小野寺の命を狙ったチンピラ共は、全員病院送りとなった。
そして、瑠奈に恐怖を感じ、この街から姿を消した。
だが一人だけ、まだこの街に残っている。その男は入院中に、人のやさしさを知り、心を入れかえ、今は真面目に生きている。

「さて、そろそろ行くかのう」

「フン、いつか、親父にも、あの空手家ヤローにも、あんたにも、負けないくらい強くなってやる」

龍一は、そう言って去っていった。
小野寺も、その場を離れようと、歩き始めた。

その時、

「あっ！小野寺先生、どうも、こんにちは」

一人の少年が、小野寺にお辞儀をした。

「おう、秀一か……」

小野寺に、挨拶をしてきた少年は、小林秀一だった。
実は、秀一に少林拳を教えていたのは、小野寺であった。

「今、面白い男に二人も出会ったわ」
「面白い男？」
「一人は空手家、もう一人は、お前が前に言っておった喧嘩屋修羅じゃ！」
「ま、まさか、修羅のヤツ先生に喧嘩を……」
「売ってきた。じゃがなぁ秀一、少林寺拳法は喧嘩のための武道じゃない、己を鍛え弱き人を守るための武道じゃ！」
「……」
「まあ、お前も、あの少年も若い、これからじゃ」

その頃、龍一はルナの店にやって来た。
「やっと来た……今度は、あんたの父親から電話があったのよ」
「親父から！？」
「しばらく、私の所に預けるって……まあ、あんたには、まだまだ教えなければいけない事がたくさんあるし……とにかく、今日からまた、私と二人で暮らすのよ」

龍一と瑠奈は、二年以上、阿の山にこもって、二人で生活をした事があるが、瑠奈の家での暮らしは龍一にとっては、初めての事であった。

「はい！」
龍一は、再び瑠奈と暮らせるかと思うと、今日の出来事が、どうでもいいと、思えるようになった。さっきまで、鬼の様な表情をしていた龍一だったが、今はまるで、飼いならされた子犬の様であった。

「夕食まだでしょ！？用意できているから、食べな」
「はい！いただきます！」
「でもね、リュウ、あんたには、ちゃんと待っている家族がいるんだから、その事だけは、忘れるんじゃないよ」
「俺、お袋を、泣かせてしまいました……今度、謝ってきます」
「ホント、出来の悪い弟子なんだから……」
「でも、親父のヤツ、ルナさんの事を」
「偽善者って、言っていたんでしょ」
「知っていたのですか？」
「電話で、謝られたわ。でも、それは間違いじゃないわ」
「えっ？」
「間違っているのは、私の生き方……相手がどんなヤツでも、殺せば、罪人よ」

瑠奈自身、自分が罪人だという事を、誰よりも知っている。
そして、その罪を背負いながら、彼女は強く生きているのだ。

「後、親父以外に、空手家と、小野寺とかいうじーさんに負けました」
「あんた、小野寺先生にも喧嘩を売ったの！？」
「はい……」
「あきれた……これじゃ、まだまだ、奥義は教えられないわね」
「はい……」
「それから、どうせ学校に、行く気がないんでしょ！？あんたには、ちゃんと家の事や、店の手伝いをしてもらうから、もちろん、バイト代はだすわ」
「はい、分かりました。あの、僕はどこで寝ればいいんですか？」
「あんたは、下のリビングで寝なさい」

瑠奈の店の奥に、キッチンやリビング、バスルームなどがあり、二

階に、瑠奈の部屋がある。

「ああ、それから、変な事しようとしたら、ぶっ殺すからね！」

「は、はい、分かっています」

こうして、龍一と瑠奈の新たな生活が始まった。

瑠奈の店は、年中無休……

瑠奈の店が休業する時は、天神流の特別な修行がある時か、瑠奈のもう一つの仕事が、ある時くらいだ。営業時間は、朝七時から夜十八時である。

その後、夕食が済んだら、天神流の修行が、朝方四時まで続く。

そのため、二人の睡眠時間は、２時間くらいである。

だが龍一は、強さを求めた。

今までとは違う強さを……

真の強さを求めた……

第9章　龍一の過去（其の四クローン病患者）

それから一週間後……

さすがの龍一も、疲れが出始めた。

「ふー、やっと、お客さんがいなくなった」

「どうしたの、リュウ？疲れたの？」

「だ、大丈夫です」

しばらくすると、一人の男が店に入ってきた。その男の姿を見て、龍一の表情が、鋭くなった。

「何しに来やがった！？親父！」

「おいおい、それが客に対する態度か？」

店に入ってきたのは、龍一の父、武蔵であった。

「まあ、てめーに用はネー。俺は、瑠奈に話があるんだ。クソ餓鬼は席を外してくれないか？」

「ふざけんな！俺は仕事中だぞ！」

「リュウ、お前疲れただろう、部屋で休んでいな」

「はい……」

龍一は、エプロンを脱ぎ、そのまま部屋の中に入っていった。

武蔵は、コーヒーを頼み、瑠奈と話始めた。

「馬鹿息子の、世話をしてくれてありがとう」

「とんでもありません」

「それから、偽善者呼ばわりした事も……」

「前も言いましたが、おじ様の言っている事は正しいと思います。

私自身も、罪人……」
「いつまで裏世界で生きるつもりだ！？良昭先生も、武も、そして、お前の母も、お前が、裏社会で生きる事を、望んじゃいない……それは、お前自身が一番よく知っているはず」
「……」

しばらくして、瑠奈がコーヒーを出した。
「うまい、これなら喫茶店だけでも、食べていけるだろう」
「裏の仕事で、依頼人から、お金をもらったことはありません」

スイーパー……日本語に訳せば始末屋だが、瑠奈は人間のクズしか始末しない。
警察は、事件が起きてからしか動かない。たとえ命を狙われている者がいても、証拠がなければ動けないのだ。そのために、大事件となる事もある。
だが瑠奈は、依頼人が心の底から助けを求めれば、命に代えても、その依頼を果たす。
そして、依頼人の笑顔が、なによりの報酬なのであろう。
だが、中には、小野寺の時のような例外もある。
天神流の後継者は、皆修羅となる。瑠奈も相手が強ければ、修羅となってしまうのであろう。

「確かに瑠奈のおかげで、助かった人は多いらしいな……ところでお前、彼氏はいないのか？」
「いません」
「そうか……お前なら気づいていると思うが、俺の馬鹿息子は、お前に好意があるみたいだが……」
「私は罪人、リュウには、私なんかより、もっといい女性と付き合ってほしいのです」
「まあ、アイツはまだ、中坊だしなぁ」

「私は、沙織おば様の気持ちを知っていたのに、リュウに武術を教えてしまいました。おじ様を倒した天神流を……」
「瑠奈、それは間違いじゃない。間違っていたのは俺だ。龍一に護身術として、武術を教えていたら、アイツはいじめられなかっただろう……あの時、俺は何もしてやれなかった。アイツも男としてのプライドがあったのだろう、絶対にいじめられていた事を言わなかった」

武蔵は、コーヒーを飲み終え、コーヒー代とは別に、龍一の生活費を瑠奈に渡そうとしたが、
「今日は私のおごりです。それと、アイツに必要なお金は、アイツ自身、ここで働いて、払ってもらいますから」
もちろん瑠奈は、龍一からもお金を取るつもりはない。
「そうか、だが、コーヒー代は置いてくぜ。アイツを頼むな」
そう言って武蔵は店を出た。

その夜……
「すいません。いつの間にか寝てしまって……」
龍一はあの後、そのまま寝てしまったみたいだ。
「ご飯、できているから食べな」
「はい、いただきます！」
龍一が夕食を食べ始めた。
「親父、何しに来たんですか？」
「あんたをヨロシクって、頼みに見えたのよ。それからさっき、南ちゃんが来ていたわ」
「南が！？」
「あんたに、合わせたい人がいるみたいよ」
「俺に！？」
「女の人らしいわよ！また近いうちに来るって」

その時、
ピンポーン
とインターホンが鳴った。
「南かな？」
そう言って、龍一は玄関に向かった。
そして、玄関を開けると、そこに居たのは、母沙織であった。
「お、お袋……」
「元気そうね。これ、着替え、お父さんに頼んだけど」
「あら、おば様、こんばんは」
「瑠奈ちゃん、お久しぶり」
「どうぞ、上がってください」
「今日はただ、この子の着替えを持ってきただけで、今度ゆっくりと、遊びに来るわ」
沙織は、着替えを龍一に渡し、帰ろうとした時、
「お袋、この前はゴメン……」
龍一が沙織に、この前のことを謝った。
「たまには、家に帰ってきなさい」
「ああ、たまには、顔を出しに帰るよ」
龍一は、途中まで母を見送った。

「この辺でいいわ。ありがとう」
「ああ」
「あんまり無理しないようにね。休む事も必要なのだから」
「分かったよ。それじゃ」
さすがに、瑠奈と同じリズムで生活をしていては、龍一は倒れてしまうだろう。
そのため、瑠奈は龍一に、店の手伝いを週４にして、時間も十一時～閉店までにした。

それから三日後の午後……

ピーク時が過ぎ、お客は一人もいなくなった。
その時、店にある男が現れた。
「いらっしゃいませ！」
龍一が、丁寧に接客をした。
すると男は、
「瑠奈ちゃん、お久しぶり」
その男は、瑠奈の事を知っているようだ。
瑠奈も、その男にあいさつをする。
「ホント、久しぶりね。3年ぶりかしら」
男は、龍一の方を見て、
「この子が、瑠奈ちゃんの弟子かい？」
と、瑠奈に尋ねた。
「ええ、出来の悪い弟子で、困っているんですけど」
「どうも、すいません」
龍一は、申し訳なさそうに答えた。
「出来が悪いか……俺も昔はそうだったな」
「あの小野寺先生にまで、喧嘩を売ったらしいのよ」
「小野寺先生か……懐かしいなぁ。あの時、瑠奈ちゃんに、病院送りにされたのが、昨日の事のように思える」
「（ルナさんに、病院送りにされた！？）」
男はコーヒーを頼んだ。
すると瑠奈は、
「体調の方はいいの？」
と、男に尋ねた。
「まあまあかな！？2年前から、パン工場で働いている。それより今度、美奈子と結婚するんだ」
「やっと、美奈子さんと結婚するのね。おめでとう」
「ありがとう。瑠奈ちゃんが月の女神なら、美奈子は愛の女神かな！？」
「確かに美奈子さんは、ヴィーナス（愛の女神）かもね・・・」

「ルナさん、この人は誰ですか？」
瑠奈はしばらく黙っていた。
すると、男が答えた。
「俺の名は、野々村将太……昔、瑠奈ちゃんに、小野寺先生を始末してくれと、依頼した事があるんだよ」
龍一は、男の言葉を聞いて、何者なのか分かった。

五年前に小野寺　辰彦を始末してくれと依頼した、チンピラの一人だという事を……
だが龍一には、なぜ、そんなクズと瑠奈が仲良くしているのかは、分からない。
「他のヤツらは、留奈ちゃんに恐怖を感じ、この街から姿をけしたが、俺は入院中に、瑠奈ちゃんや美奈子のおかげで、人の優しさを知る事が出来た」

将太の婚約者、美奈子は、看護師である。年は二十八歳で、将太は美奈子の二つ下である。
将太は最初、整形外科で入院していた。怪我も治り、本当なら、他のチンピラ共と同じように、退院できるはずだった。
しかし、お腹の痛みが消えない。
将太は、そのまま内科病棟に移された。
そして、検査の結果、彼の病名が分かった。
クローン病だ！
あの愚かな男、野村昇児と同じ病気だ！

「最初は、治らないと聞いて、世の中がイヤになったよ。そんな時、留奈ちゃんが見舞いに来てくれた」
「他の連中は退院しているのに、野々村さんだけ、まだ入院していると聞いたから」
「すごく嬉しかった。その時、瑠奈ちゃんの優しさを知ったよ」

「私もその時、クローン病という病気を知ったわ」
「クローン病！？クローン人間なら知っているけど……」
龍一には、初めて聞く病名だ。
クローン病は、一九三二年に、クローンという人が発見したところから、その名前が付けられた。そのため、クローン氏病ともいわれている。
クローン病は、口から肛門までの消化器に潰瘍が出来るが、主に小腸や大腸に潰瘍が出来る。
「腸が細くなったり、穴が開いたりするんだぜ！しかも、腸を安静にするため、胸から点滴をして、絶食なんだぜ！」
「ホントですか！？」
「ああ、けど、すごい激痛だったから、食欲なんか無かったけど・・」
将太はこの時、腸閉塞を起こしていた。そのために、緊急手術となった。
クローン病は、命に係わる病気ではないが、腸閉塞や血便が止まらなかったりすれば、当然命に係わる。そのため、緊急手術が必要とされる。
野村　昇児もそのために、三回も手術をしている。
「今度はそのため、外科に移されたんだ。術後には、二、三日、付き添いが必要だったが、俺には親がいないんだ」
将太の両親は、彼が十八の時に、交通事故で亡くなっている。
「俺は、昔からワルをやっていて、結局、親孝行出来なかった」
将太の目から涙が流れた。
「将太さん……」
龍一は、やっと分かった。今の将太がクズでないという事を……

将太は涙を拭いて、再び語り始めた。
「術後、俺の付き添いをしてくれたのは、瑠奈ちゃんだ。手術後は、次の日から歩かされた。術後の痛み、体中にはたくさんの管、けど、瑠奈ちゃんがいたから、苦痛の中、次の日から歩く事が出来た」

手術して、次の日から歩くのは、再び腸閉塞を起こさないためでもあるが、再び腸閉塞を起こしてしまう人もいる。

「この時、瑠奈ちゃんにも親がいないと知った。俺はこの時、瑠奈ちゃんに恋をしていた。調子がよくなったら告白しようと思った。そして、地獄の二週間を、外科で過ごし、再び内科に戻るのだが、所詮、治らない病気……問題なのは、食事だ。点滴のカロリーを減らして、エレンタールという栄養剤を飲まなければいけないのだが、これが不味いんだよ。一応、いろんな味のフレーバーがあるんだけど、不味い！」

エレンタールは、粉を溶かし、飲む方法と、鼻から管を通して、点滴のようにゆっくり落として、栄養を取る方法がある。
また、エレンタールは、一パックに三〇〇カロリー入っている。成人男性は約一五〇〇カロリー必要・・・エレンタールだけで生活するなら、五～六パックは必要となる。
他にもラコールと呼ばれる栄養剤がある。こちらは、すでにジュースのようになっており、味も何種類かあって、エレンタールよりも飲みやすい。だが、カロリーは一パックに二〇〇カロリーしかない。

「食事も、栄養士からいろいろ聞いたけど、未だに、何を食べていいのか分からん」

クローン病の食事は非常に難しい。簡単にいってしまえば、エレン

タールやラコールだけで、生活するのがいいといわれている。
しかし、それでも再発をしてしまう人もいる。逆に何を食べても平気な人もいる。
だが、腸の病気なのだから、食事は消化のいいものを食べた方がいいと思われる。
それでも調子が悪くなるなら、栄養剤だけで絶食をした方がいいと思われる。

「俺は、ある決意をした。瑠奈ちゃんに告白しようと決めたんだ。だが、ふられた」
龍一の表情が、険しくなった。自分が告白した時、ふられたと、思ったからだ。
「俺にとって、初めての恋だった。それだけに、ショックも大きかった。そんな時、よく慰めてくれたのが、美奈子だったんだ。俺は、無理だと思いながらも、退院する日に、彼女にアドレスを教えた。そして、久しぶりに、誰もいない家に帰ってきた・・次の日の朝、起きて携帯を見ると、メールが来ていた。美奈子からだった。そして、再び俺の恋が始まったのさ」

将太がこの時、入院していた期間は、二ヶ月……
普通の人なら長いと思うだろうが、クローン病や、他の難病患者からすれば、二ヶ月など、マシな方だろう
彼らは、半年や一年の入院ですら当たり前、しかも、クローン病は、治療のため絶食、ひどい時は、水を飲む事さえ出来ないのだから……
更に、退院してもすぐに戻ってくる人もいる。
将太も、その後、数え切れないほどの入退院を繰り返している。

「さて、そろそろ行くか……ごちそうさん」
将太が、コーヒー代を払おうとしたら、龍一が、
「結婚祝いにしては安いかもしれないけど、今日は俺のおごりで

す」
「ありがとう。君の名前は？」
「神威　龍一です！」
「龍一君か、君の恋もうまくいくといいね」
「えっ！？」

将太には分かっていた。龍一が、瑠奈に好意を持っているのが……
そして彼は、店を出た。

第１０章　龍一の過去（其の五月の女神）

次の日の朝方……

天神流の稽古を終え、布団に入るが、龍一は眠れなかった。
彼は迷っていた。瑠奈に告白をするべきか、それとも、あきらめるべきか……
結局彼は、一睡も出来なかった。
そして店に出ると、そこには、南と一人の女性が、龍一を待っていた。

「南、俺に合わせたい人って、その人かい？」
「そう、バイト先で友達になったの」
「麻奈美といいます」
「どうも、龍一です」

麻奈美は、髪を青く染めているが、すごくおとなしい感じの女性だった。
南は、中学を卒業してから、カラオケ屋でアルバイトしている。麻奈美とは、そこで知り合ったみたいだ。
麻奈美は、南の二つ上で、龍一とは四つ上になる。

「麻奈美は、バンドやっているの。だけど、ヴォーカルが辞めちゃって、最初は、瑠奈さんに頼んだのだけど、忙しいからって断られたの、それで、あんたを紹介使用と思って……」
「バンドか……俺にヴォーカルなんて出来るかな！？」
「龍一さん、お顔もいいし、いいお声をしていますよ」
龍一の顔が、赤くなった。

どうやら龍一は、初めて会った麻奈美に、ときめいてしまったようだ。

「（いかん、いかん……俺は、ルナさん一筋なんだ）」

「リュウ、やってみたら？」

「ルナさん……」

瑠奈はすぐに分かった。龍一が麻奈美に好意を持った事を……

「分かりました。やってみます。それで、バンド名はなんていうんですか？」

「アリスといいます」

麻奈美は、アリスのギターでもあり、リーダーでもある。

アリスというバンド名をつけたのも麻奈美だ。彼女は、ルイス・キャロル原作の、不思議の国のアリスが大好きだ。

不思議の国のアリスは、白いうさぎを追って、アリスが不思議の世界に迷い込んでしまうというお話だ。

麻奈美は、自分達で不思議な世界を創り、観客にアリスとなってもらい、不思議な世界を体験してもらう。

それが、彼女の作ろうとしている音楽の世界だ。

「アリスか……いいね。俺も、あの話は大好き」

その時、三人のお客が入ってきた。

「いらっしゃいませ！」

龍一がまた、元気に接客しようとした。

「やっと、来たみたいですね」

「麻奈美さんの知り合いですか？」

「皆、こちらが、アリスの新しいヴォーカリスト、神威龍一さんよ」

この三人は、アリスのメンバー達だった。

ギターのセイジ、ベースのユータ、ドラムのカミヤ……

「麻奈美ちゃん、こいつ中坊じゃないですか！？こんなヤツと一緒にやるんですか？」
「な、何だと！」
セイジの言葉に、龍一は切れそうになった。
「金髪に女顔……こいつ、修羅とかいって、調子こいているヤツだろ！？」
カミヤも、挑発的な態度であった。
「上等だ！コラー！」
しばらく黙っていた、麻奈美であったが、
「お前らはここに、喧嘩しに来たのか？」
麻奈美の一声で、メンバー達が黙り込んだ。
「ごめんなさいね。龍一さん」
「は、はあ、麻奈美さんは、元ヤンですか？」
「そんな昔の事は、忘れました」
「と、とにかく、ヨロシク」
こうして龍一は、アリスの二代目ヴォーカリストとなった。

その日の夜……
「リュウ、麻奈美ちゃんの事が気になるのでしょう！？」
「そ、そんな事……」
「彼女、彼氏がいないみたいよ」
「そ、そうなんですか（やはりルナさんは、俺の事なんか……）」

三日後……
南と麻奈美が、店にやって来た。
「麻奈美さん！いらっしゃいませ！」
「龍一、私もいるんだけど」
「あっ、南、いらっしゃい」
「ちょっと、麻奈美の時と態度が違うじゃない！」

「そうか～、麻奈美さん、ご注文は？」
「コーヒーを、お願いします」
「私は、コーラとハムサンド！」
「はい、はい」

しばらくして、龍一がコーヒーと、コーラと、ハムサンドを持ってきた。
「ちょうど、俺も今から昼休憩なんだ」
そう言って、龍一は、南の隣に座った。
「何で、私の隣に座るのよ？」
「麻奈美さんの隣だと、緊張するし、喋りづらいじゃない」
龍一はそう言って、麻奈美と話始めた。
「麻奈美さんは、ファンタジーものが好きなんですよね？」
「はい」
「俺、ヘリー・コッター好きなんですよ。本も全部読んだし、映画もＤＶＤで観ました」
「私も大好きです。でも映画の方は、一番新しいのだけ観ていないです」
「炎のビスケットですか！？今度、貸してあげますよ」

しばらく黙って、ハムサンドを食べていた南だったが、
「ねェ、龍一」
そう呼びかけるが、龍一は、麻奈美との話に夢中で聞こえていない。

「でも、一作目の話が、俺は一番好き、ヘリーがヘリコプターに乗っていたら、魔法の世界に迷い込んじゃうんだよね」
再び、南が呼びかける。
「龍一！」
「何だよ！？」
ようやく、南の呼び声に気づいた。

南は、龍一を連れて、店の外に出た。

「あんた、どういうつもり？」

「何が！？」

「あんた、瑠奈さんと、麻奈美と、二股かけるつもり？」

「南、俺とルナさんは、付き合っているわけじゃない」

「だってアンタ、瑠奈さんのことが……」

「所詮、無理なんだよ。ルナさんは、今でも武さんのことが……」

「そ、そうよね。だから、北斗（アニキ）も……」

「北斗さんが、何だよ！？」

「な、何でもない……麻奈美と、うまくいくといいね」

「……」

「私、邪魔みたいだし、帰るわ」

「南……」

「じゃあね！」

「あっ、コーラとサンドイッチ代！」

「いい人、紹介してあげたんだから、アンタのおごりに、決まっているでしょ！」

そう言って、南は帰っていった。

「たく、ああいうヤツは、絶対長生きするな」

だが南は、子供を助けるため、十八という若さで、この世を去ってしまう……

龍一は、再び店の中に入っていった。

「南、帰っちゃった」

「そうですか。では、私もそろそろ」

「リュウ、送っていてあげな」

「はい！」

しばらく、龍一と麻奈美は、話ながら歩いていた。
龍一は心の中で、告白をしようと決めた。
そして、龍一が立ち止まった。

「俺、麻奈美さんのことが……その……好きです！」
「……私、正直な人が好きなのです」
「……」
しばらく沈黙が続いた。

そして……
「俺は、本気でマナミの事が好きだ！それは嘘じゃない。けど、それ以上にルナさんのことが好きだ！俺は最近、夢を持った。最強の格闘家……それが、俺の夢……」

「そうでうすか。では、音楽をやっている暇なんてありませんね……ヴォーカルは、また新しく探します」
「ゴメン……けど……一度だけ、俺をステージに上げさせてくれ！」
「はい！」
「じゃあ俺、店に戻るから」
「龍一さん、あなたの気持ち、すごく嬉しかったわ。この言葉は嘘ではありません」
「ああ、じゃ、また」
麻奈美を途中まで送って、龍一は店に戻った。

「おかえり、どうだった？」
「自分の気持ちを、彼女に伝えました。けど、俺には、本当に好きな人がいるから……」
「そう……」
龍一はいつか、自分の気持ちを瑠奈に伝えようと、そう心に決め、

再び仕事に戻った。

数週間後……

この日、龍一が、初めてステージに上がる。

この日のために、龍一は、天神流の稽古を休み、歌の練習に励んだ。

「ルナさん、絶対来てくださいよ。特に最後の曲は、俺が詩を書いたんだから」

「ちゃんと行くわよ」

そして、アリスのライブが始まった。

ライブハウスには、瑠奈だけでなく、トオル、南、静、ミツオ、そしてプレシャスのメンバー達も観に来た。

「ようこそ、アリスの不思議な世界へ……」

龍一は、王子様のカッコウを、麻奈美は、お姫様のカッコウを、セイジは、ピエロ、ユータは、魔女、カミヤは、天使のカッコウをして現れた。

「今宵は、このカムイが、皆様を案内(あない)させていただきます」

龍一らしくないセリフだが、彼は今、喧嘩屋修羅ではない。カムイ王子だ。

だから、修羅の名を使わずに、苗字の神威を使ったのだろう。

この、ライブハウスで瑠奈達以外に、彼らの演奏を、本気で聴いている人が何人いるかは、分からない。

だが、龍一が歌っているのは、瑠奈に聴いてもらうため、そのために、ステージに上がったのだから……

そして、次が最後の曲……詩は龍一が書いたという曲だ。

「最後に、この曲を聴いてください……月の女神！」

龍一が、瑠奈のために書いた詩だ。
この時、瑠奈はどのような気持ちで、この曲を聴いていたのだろう
曲が終わり、龍一が最後に、
「オ・ルヴォワール」
そう言って、ステージを降りた。フランス語で、さようならという意味だ。
龍一は別に、フランス語が話せるわけではない。たまたま、知っていた言葉を言っただけである。
しかし、師匠の瑠奈は、フランス語、英語、更に、中国語まで話せる。
裏の世界で生きるために、彼女はいろいろな国の言葉を学んだのであろう。

そしてライブが終わり、龍一は、麻奈美や他のメンバー達と朝まで飲み明かした。

店に戻った龍一だが、飲みすぎたため、二日酔いとなった。
彼は以外と酒が弱い。といっても、彼は未成年だ。タバコと一緒で、未成年の飲酒は法律で認められていない。

この日、龍一はお休みで、昼過ぎまで眠っていた。
目が覚め、顔を洗い、瑠奈にあいさつをしに、店に出てきた龍一……
「おはようございます！」
「もう、昼過ぎよ」
「き、昨日のライブ、どうでした？」
「良かったわよ。あんた格闘家より、ミュージシャン目指したら！？」
「がんばって、最強の格闘家になります！ちょっと、散歩してきます」
そう言って、彼は散歩しに出かけた。

龍一が、散歩をしていると、公園で、高校生カップルが、三人のヤンキーに絡まれていた。
「こんなヤツより、俺達と遊ぼうぜ」
その時、
「お前らとは、俺が遊んでやるよ！？」
龍一が現れた。
「ああ！？（き、金髪に女顔……修羅……）」
「お、俺達……よ、用事がありますから、失礼します！」
三人は、そう言って、公園から去っていった。
「ありがとうございます」
高校生カップルが、龍一にお礼をいった。
「ああ……なあ、あんた達、高校生だろ！？」
「はい」
「高校って、楽しいか？」
「俺は、楽しいと思っています。高校に行ったから、彼女とも出会えたし……」
「そうか……」
龍一も、来年は三年生だ。この時から、彼は高校に行く事を決意する。

彼は途中で、参考書を買うため本屋に立ち寄った。
その時彼は、父親が書いている本を手に取る。読書家の彼だが、今まで父親の本だけは読んだことがない。彼は夢中で本を読み始めた。

龍一が店に帰ってきたのは、夕方過ぎだった。
「ルナさん！俺、明日から、学校に行きます！」
「ど、どうしたの……急に……」
「俺、高校に行くことに決めました！」
彼は、遅れたぶんを取り戻すため、猛勉強をし始めた。

そして龍一は、舞達と同じ桜木高校に入学した。

ふと、目を開け、

「……あんな頃もあったんだな……」

そう、龍一はつぶやいた。

そして、龍一が阿の山にこもる日がやって来た。舞達は気を利かせて、わざと見送りにこなかった。

「ルナさん、行ってきます！」

「いってらっしゃい」

龍一を抱きしめ、瑠奈が優しくキスをした。龍一にとって、あの時の夜以来のキスだ。

そして龍一は、店を出て阿の山に向かった。

最強の格闘家になるという、夢に向かって……

第１１章　継承者

強さを求めているのは、龍一だけじゃない。
舞や一は、今までよりも厳しい空手の稽古を開始した。
秀一も小野寺から、今までより厳しい少林寺拳法の修行を開始した。
四郎は柔道部に入部し、再び柔道の稽古に励んだ。
トオルも、再びボクシングジムに通い始めた。

そして龍一が山に篭ってからから、一年が流れた……

「助けてー！」
一人の少年がヤンキーにいじめられていた。
「逃げるなよ！」
その時、一人の少年が現れた！
「かつてこの街に、修羅と名乗る喧嘩屋がいた」
「ああ！？」
「今その喧嘩屋は、どこにいるのだろう」
ヤンキーがその少年を見て、恐怖を感じた。
「しゅ、修羅……」

龍一だ！龍一が山から下りて、この街に戻って来たのだ。
ヤンキーはあわてて逃げていった。
少年も龍一にお礼を言って去っていった。

「やっと、帰ってこられた。この街に……」
「龍ちゃん！」
舞、一、四郎の三人が、学校から帰宅途中に龍一と出会った。
「皆！久しぶり」

「龍一、今帰ってきたのか？それにしても、すごいカッコウだな」
髪の毛はボサボサに伸び、道着はボロボロ、それだけで、龍一が阿の山で、どれだけの荒行をしてきたのかが分かる。
「今から美容院に行って、綺麗になってから、ルナさんの店に行こうと思っているんだ」
「じゃあ俺達、先に瑠奈さんの店に行っているよ」
「馬鹿ね。こういう時は、二人きりさせてあげるの」
「いいよ、皆とも話しをしたいし、それに、久々に会うから、緊張しているんだ」
龍一は一度家に帰り、その後で美容院に行った。

喫茶ＬＵＮＡ……

三人は瑠奈に、龍一が帰ってきている事を、わざと話さなかった。
瑠奈自身も、いつもと違う3人の態度を見て気づいていた。
だが瑠奈は、三人の気持ちが分かっているから、あえて聞かなかった。

しばらくして、龍一が現れた。
「た、ただいま帰りました」
龍一は少し照れくさそうな顔をしていた。
「おかえり」
瑠奈も少し照れくさそうな感じだった。
龍一は瑠奈に、何を話していいのか分からなかった。

そして龍一は、舞達と同じ席に座った。その間に、瑠奈との会話を考えようと思ったのだ。
しばらく4人で馬鹿笑いをしていたが、一の表情が険しくなる。

「一ちゃん、どうしたん？」
「実は一週間前に、転校生が入ってきたのだけど、僕も舞ちゃんも四郎君も、その子の事が気になっているんだ」
「何を！？」
「その子の名は、不知火隼人、髪を赤く染めていて、先輩達からも目をつけられていた」
「それである日、先輩達から呼び出されて、偶然その時、私が見かけたのよ。大変だと思って、助けようとしたのだけど……先輩達は、一瞬で倒された」
「俺も、アイツは気に入らない。ボコボコにされれば良かったんだ」
「四郎（あんた）は黙っていて、それでその時、その子が使った技……あれは、天神流だったわ」
「不知火……」

龍一はそうつぶやくと、しばらく黙り込んだ。
そして、龍一が語り始める。

「天神流は一子相伝、幕末までは、後継者になれなかった者は、たとえ我が子でも殺さなくてはならない……それが運命（さだめ）だった……その運命を変えたのが、天神流十三代目不知火彦斎」
「不知火　彦斎！？」
「彦斎の母の名は蛍、父は不明、だが、河上彦斎ではないか……とも言われている」
「あの大思想家、佐久間象山を暗殺したという幕末の人斬り河上彦斎の事！？」
「うん」

江戸の頃になると、時代は太平の世に向かっていた……

だが、一八五三年……黒船来航により、時代は大きく変わってゆく……

多くの志士達が、尊皇攘夷などの理想のため、明日の日本のために、倒幕に乗り出した……

それが、幕末と呼ばれる時代である。
この幕末の時代に、河上彦斎という人斬りがいた。
彼は一八三四年（天保五年）肥後生まれ

河上は、我流の剣術、不知火流という、居合い、または抜刀術の使い手である。
右足を前に出して構え、後ろに伸ばした左膝が着くほど姿勢を低くして、右手一本で斬りかかる、という極めて独特な居合い術だ。

天神流には、こんな伝説がある。
一八六三年（文久三年）……動乱の京……
「河上彦斎殿とお見受けする」
「（女！？）　そうか、そなたが噂の鬼姫か……」

動乱の京で、鬼姫と呼ばれている女、それが天神流十二代目蛍だ！
彼女は、明日の日本のために戦っているのではない。
真の兵を求めて戦っているのだ。
彦斎との戦いの前には文久二年に、越後出身の志士、本間精一郎が暗殺された日に、実行犯で河上同様、幕末四大人斬りの一人、薩摩の田中新兵衛と、同じく幕末四大人斬りの一人、土佐の岡田以蔵とも戦い勝利している。
そして今、幕末四大人斬りの一人河上彦斎との戦いが始まろうとしていた。

「貴女は兵を求めて戦っているみたいだが、私は貴女が求めている兵ではない」
「いや、お前は強い！」
しばらくの間、二人は睨み合う
そして、河上が抜刀した。
蛍は、河上の頭上よりも高く跳んだ。
「（消えた！？）」
河上がそう思ったとき、蛍の天誅が炸裂！
「な、何という技だ」
「これが私の天誅だ！」
天誅……この頃、多くの志士達の間で使われていた言葉だ。
天に代わって、罪を裁くという意味だ。

河上が、蛍に刀を渡そうとした。
「私は人斬り、だが、そなたのような美しき鬼姫に斬られるなら、悔いは無い」
だが蛍は、この時、河上に止めを刺さなかった。

それからしばらくして、蛍は一人の男児を産む。
名は彦斎、後に天神流十三代目となる男だ。
彼女が、河上に止めを刺せなかったのは、二人の間に愛が芽生えたからかもしれない。
その後蛍は、阿の山に戻り、子供と、師でもあり、養父でもある辰巳としばらく暮らす。
蛍は赤子の頃に竹やぶに捨てられていた。その時に、辰巳に拾われ天神流を学ぶ事となる。

蛍との戦いから一年後の一八六四年（元治元年）……

新撰組が池田屋事件で、その名を天下に鳴り響かせた時、河上は佐久間象山を暗殺した。
「初めて人を斬る思いがして、髪の毛が逆立つ思いがした」
そう語り、彼はそれ以後、暗殺をしなくなったという。

時は流れ、一八六七年（慶応三年）……
十月十四日に大政奉還が成される。
だが十一月十五日、坂本竜馬が近江屋で暗殺される。十七日には、同席していた中岡慎太郎も息を引き取る。
それからしばらくして、蛍が京に戻ってきた。

坂本は北辰一刀流免許皆伝の腕前だ。蛍が求める兵であっただろう。彼女がもう少し早く京に戻っていたなら、二人は戦っていたかもしれない。

そして、ある月夜の晩……

二人の長州の志士が、数名の新撰組隊士に追われていた。
「覚悟しな！」
一人の隊士が斬りかかろうとした時、どこからか苦無が飛んできた。
「誰だ！？」
「お前達に用はない」
「用があるのは……私ですか？鬼姫殿……」
「組長！」

その男こそ、新撰組一番隊組長沖田総司であった。

「貴女の噂はいろいろと聞いています。ですが、私には、女性を斬る事は出来ません」

「戦いに、男も女もない、それに本当のお前は、私と戦いはず」
「……」
「く、組長！」

沖田は知らないうちに、刀を抜いていた。
そして、二人の激しい戦いが始まった。
スキを見て、長州の志士達はその場を去ることが出来た。
沖田は晴眼の構えから、やや右に刀を開き、刃を内側に向けた。平晴眼と呼ばれる構えだ。
そして、沖田が三段突きを放つ。だが、
「私の突きがかわされるとは……」
蛍は沖田の突きを全てかわした。そして距離を置き跳んだ。天誅だ！
だが、
「お前の方こそ、私の天誅をかわすとは……」
沖田も蛍の天誅をかわした。
だが、
「ゴホッ……ゴホッ……」
沖田が吐血をした。
彼の体はすでに病に侵されていたのだ。
「お、沖田！？」
蛍は、しばらく沖田の様子を見ていた。そして、
「この勝負、お前の病が治るまでおあずけだ」
そう言って、蛍は去っていった。
しかし、二人が戦うことは二度となかった。

時代の流れは止まらない。一八六八年（明治元年）……
戊辰戦争の始まりである鳥羽伏見の戦いが幕を開く……
だがこの戦いに沖田は参加していない。それだけ彼の病はかなり悪化していたのだ。
彼には分かっているのだろう。自分の死期が近いのを……

だが沖田は、他の病人達と冗談を言って、笑ってばかりいた。
師でもあり、新撰組の局長の近藤勇は、
「あんなに死に対して悟り切っているヤツも珍しい」
と語った。
だが四月二十五日、沖田よりも先に、近藤勇が板橋刑場にて斬首される。
そして、沖田総司が五月二十五日に病死……

翌年、一八六九年（明治二年）……

新撰組は、北へ北へと戦い続けた。
だが、五月十一日、まるで沖田と近藤の後を追うかのように、鬼の副長、土方歳三が戦死する。

天神流にも、鬼と鬼姫が戦ったという伝説はない。
土方は、蛍が一番戦いたい相手だっただろう。
土方自身もそれを望んでいたことだろう。
だが土方はこの日、銃弾を受け戦死したのだ。

それから間もなくして、戊辰戦争が終結する。

一八七一年（明治四年）……

維新後、河上彦斎は、攘夷思想を曲げ切れず、維新政府と相反し、更には無実の罪を問われ斬首される。享年三十八であった。
蛍はその後、不知火蛍と名乗るようになった。

時は流れ、天神流は、蛍から彦斎に受け継がれた。
彦斎には、三人の子供がいた。後継者となったのは、次男の幻次である。

だが彦斎は、我が子を殺す事ができなかった。二人の子供が、その後どうなったかは、不明だ。
だが彦斎は、天神流の運命を変えた。

「十四代目となった幻次には三人の弟子がいた。一人は彼の娘の灯、もう一人がルナさんのおじい様、そして、堀辺正宗……僕も、阿の山に行く前に知ったんだけど、この人は、僕のお父さんの師匠なんだ」
「格闘王の師匠！？」
三人が同時に驚いた。
「そして、十五代目となったのが、ルナさんのおじい様……本来は、後継者にならないと、技を教えてはいけない。堀辺先生も天神流を捨て、骨法などを学び、天神流を越える技を編み出そうとしていた。だがおそらく、幻次の娘不知火灯が、子供と孫、そのハヤトという男に技を教えたんだと思う」
「じゃあ、ハヤトがこの街に来たのは……」
「私に会うため……天神流の後継者になるには、全ての技を会得し、強い者が後継者になれる・・ハヤトが全ての技を会得しているなら、後継者になる資格があるわ」
「それじゃ、龍ちゃんはどうなるのですか？」
「リュウも、全ての技を会得している。もし本当にハヤトが、後継者になるために、この街に来たのなら、二人を戦わせて、勝った方を後継者にするわ」
「龍一がもし負けたら、どうなるのですか？」
「天神流は、全ての技を会得し、強い者が後継者になれる。負けた者は、天神流を捨ててもらうわ」
「僕は戦いますよ！そして、自分の夢のために勝ちます！」
天神流の後継者になるには、大体、二十年くらいかかる。瑠奈ですら、約十四年かかっている。もし、龍一がハヤトに勝てば、七年と

いう異例な早さで後継者になったこととなる。

第１２章　天神流１８代目神威龍一

次の日、桜木高校……

舞がハヤトに話かけた。

「ねぇ、不知火君」

「なんだ！？」

赤く染めた髪、鋭い目つき、それが、不知火隼人だ。

「あなたも何か武道をやっているみたいね！？」

「関係ないだろう」

「去年まで、この学校に天神流という古武術の使い手がいたわ」

「ああ！？灯（ババア）の話では、プロのスイーパーと聞いたが……」

「それは、その子の師匠」

「そうか、弟子がいたのか」

「それで、あなたも後継者になりたくて、この街に来たのでしょ？」

「そうだ！俺は全ての技を会得している。そして、強い！ババアは、再び天神流を、不知火一族のモノにするため、俺や親父、祖父（ジジイ）やお袋にまで技を教えた。ジジイはババアに惚れ、婿入りした。だが、俺が小さい時に亡くなった。親父やお袋は腰抜けだから、後継者争いから身を引いた。だが、俺は違う、必ず俺が、後継者になってやる！」

「現継承者である。月形瑠奈さんが、弟子の神威龍一と勝負して、勝った方を後継者にするって」

「フン、面白い！」

「明日、土曜の朝方、時間は午前四時、場所はこの紙に書いてあるから……後、負けた者は、天神流を捨ててもらうって、おっしゃっていたわ」

「上等だ！」

放課後・・喫茶ＬＵＮＡ……
「一応、伝えてきました」
「舞ちゃん、ありがとう」
瑠奈が、舞にお礼を言った。店には、舞、一、四郎のいつもの三人だけで、龍一の姿が見えない。
「龍ちゃんは？」
「あいつは、その辺をジョギングしているわ」
ジョギングといっても、龍一がこの時に走った距離は五十キロ以上だ。
戦いは明日の朝方、下手に体力を使うと不利になるのは分かっているはず。
だが今の龍一には、五十キロくらいなら、たいした距離ではない。
龍一は、五十キロを走り終え、店に戻った。

「ハアハア、ただいま帰りました！」
少し息切れをしているが、とても五十キロを走ってきた感じには見えない。
「みんな、僕、明日に備えて、もう寝るから、ルナさん、今日は泊めてもらいますね」
そう言って、店の奥に入っていた。

そして、午前四時……

指定の場所に、ハヤトが現れた。
龍一と瑠奈は、一時間前から待っていたようだ。
龍一もハヤトも、天神流の道着を着て、腰には刀が……
この戦いは、今までの戦いとは違う。龍一は、瑠奈から奥義の使用も認められている。

そして、二人の戦いが始まろうとした。

その時！

「間に合った」

舞、一、四郎がやって来た。

「皆！」

「天神流の人間じゃない私達が、ここに来てはいけないと思ったのですが、どうしても二人の戦いを見届けたくて」

「ルナさん、僕からもお願いします！」

「いいんじゃない・・アンタの大切な友達なのだし……」

「ありがとうございます！」

「おい、早くしろ！」

「ああ、ワリーな」

龍一がハヤトの前に立ち、互いに礼をし、そして、二人の戦いが始まった。

龍一は刀を抜き、正眼に構え、そして、神速で袈裟斬り！

だが……

「さすがだな〜、ハヤト……僕の閃光雷（せんこういかずち）をかわすとは……」

天神流閃光……神速で相手に袈裟斬りをし相手を瞬殺する天神流の剣術。

だが、この技をかわされた時、突き又は薙ぎなどに変換し、第２の攻撃を行うことを「雷」と呼ぶ。

素人なら最初の一撃で瞬殺、玄人さらに達人でも第２の攻撃「雷」で勝負が決まる。

だが、ハヤトは袈裟斬りを後ろに飛んでかわし、龍一は第２の攻撃に胴へ突きをするが、今度は横に避け、「雷」をかわしたのだ。

「今度は俺の番だぜ！」
そう言うと、ハヤトは龍一の頭上より高く跳んだ！天誅だ！
龍一はハヤトの天誅を紙一重でかわした。
だが、龍一の腹から血が……

「な、何で、龍ちゃんのお腹から血が？」
「リュウが天誅をかわした後、ハヤトは、抜刀したのよ。その時、リュウは後ろに跳んだ。だから、あの程度で済んだのよ。もし、リュウの反応が少しでも遅れていたなら、死んでいたかも」
「そ、そんな……」
「思ったよりやるな～、だが、俺の編み出した抜刀術、不知火はかわせないぜ！」
「抜刀術、不知火！？」
「行くぜ！」
「（正面から突っ込んできた・・）」
ハヤトの手が刀に……
「（来る！）」
龍一は、再び後ろに跳んだ。
だが、
「（フェイント！？）」
ハヤトは刀を抜かず、龍一の後ろに回った。
「死ねー！」
ハヤトが龍一の背後を取り、刀を抜こうとした。
だが、
バシッ！
ハヤトが刀を抜こうとした瞬間、龍一の後ろ回し蹴りが炸裂した！
「（な、何！？）」
ハヤトはそのままふっ飛んだ。
「ば、馬鹿な、俺の不知火が……」
「正面から突っ込んで、抜刀するとみせかけ、相手が本能的に避

けようとした方向を読み、超スピードで相手の背後に回り抜刀する。
それが、お前の編み出した抜刀術、不知火だろ？」
「くそ、なぜ、俺の抜刀よりも、お前の蹴りの方が速いんだ？」
「お前が、一瞬ためらったから……お前は、俺と同じで、今まで、真剣を持って戦ったことがない……そうだろう？」
「……」
「だから、自分の抜刀術がどれほどの威力か知らない。だが、最初の一撃目で、自分の剣で、人を殺す事が出来る。それが、お前には分かった。そして、心の中で、人を殺したくない。その思いが、お前の抜刀を遅らせた。だから、俺の蹴りの方が速かったんだ」
「なんか、いつもの龍一と違うな」
「そうだね。いつもの龍一君なら、相手が強ければ強いほど、修羅になるのに……」
「リュウは、阿の山で、肉体だけでなく精神的にも強くなったみたいね。もしかしたら、私を超えたかも……」
「龍ちゃんが、瑠奈さんを超えた！？」
龍一が刀を捨てた。
「フン、素手で勝負か……いいだろう」
ハヤトも刀を捨てた。
「（おそらく龍一（アイツ）は、龍神を使ってくる・・ならば、俺も・・・）」
「行くぜ！ハヤト！」
二人が、同時に奥義龍神を使った！
龍神に必要なのは、常識を超えるスピードだ！超スピードで相手の急所に攻撃する。
数秒の間にどれだけ攻撃出来るかで威力が変わる。
そして、ふっ飛んだのはハヤトだ！
龍一の方が、ハヤトより多く攻撃したのだ。

「負けを認めろ、ハヤト」
「くそ、天神流を捨てるくらいなら、死んだほうがマシだ！俺を殺せ！」
「俺は、人殺しなんかになりたくないから……それに、命は大切にするものだ！」
「……完全に俺の負けだ」
「ハヤト、俺の父さんの師匠、堀辺正宗は、天神流を越える技を編み出そうとした。お前も天神流を越える技を編み出し、また俺と戦おうぜ！それに、お前の編み出した不知火……あれは、すごかったし……」
「フッ、いいだろう」
ハヤトの顔から、笑顔が……
彼は立ち上がり、刀を拾って、去っていった。
舞達3人も、そのまま帰宅し、龍一は瑠奈と共に店に戻った。

この日は、天神流の後継者を決める大事な日、そのため瑠奈の店は休業となった。
龍一がリビングで休んでいると、瑠奈は部屋からある物を持ってきた。
「これに、お前の名前を書け」
それは、天神斎から瑠奈までの、継承者の名前が書かれていた巻物であった。
この巻物に、名前を書いた者が、継承者の証なのであろう。
龍一は、瑠奈の名前の隣に、自分の名前を書いた。
この時から、龍一は天神流の十八代目となった。
「今日からお前が、天神流の十八代目だ！」
「はい！ルナさん……あの、えっと……」
「どうしたの？」
「前にも言いましたが、僕と付き合ってください！」
「……ゴメン……お前とは、やはり付き合えない」

「そうですか」
淋しそうな顔をしている龍一を、瑠奈は優しく抱きしめた。
「リュウ、お前の気持ちに答えられなくて、本当にごめんね」
「ルナさん……ありがとう」

瑠奈は裏の世界で生きる女……
龍一には、もっと、すばらしい女性と出会い、幸せになってほしいと、心の底から思っているのであろう
そして、彼女には分かっていたのであろう
あの男が生きているということを……

第13章　伝説の悪魔

龍一が継承者となってから、二ヶ月が経った。

龍一は、更に強さを求めた……

だが、たまに、生活費を稼ぐために、瑠奈の店でアルバイトをしていた。

そして、舞、一、四郎のいつもの三人が、店にやって来た。

「龍一、お前から借りていた漫画、ここに置いとくぞ！」

「あ、うん」

三人は、ジュースを頼んだ。

「久々に読んだけど、面白いな、タイガーボールは……」

「でしょ！今度は虎衛門を貸してあげるよ。フシギ・F・フシオ先生の漫画は、最高だよ！あと、ナースムーンとか、るろうのケンシロウとかもいいよ！あっ、最近、ジャッキー・リーのポリス・怒りの鉄拳のDVDを買ったから、貸してあげるよ！」

「龍ちゃん……ナースムーンを読んでいるの？」

「うん、特に、ナースヴィーナスが好き……ルナさんとは全然違うけど、ああいう女性もいいね！」

三人と、楽しそうに、漫画などの話をする龍一……

その姿を見て、瑠奈は、自分がいなくなっても大丈夫だと確信した。

もう、瑠奈が龍一に教えることは何もない。

瑠奈は、自分がこの街にいる限り、龍一に出会いはと思っているのだ。

「でも、タイガーボールが一番好き！」
「僕も、あの漫画は好きだな」
「おう！俺も、なんといっても、孫空悟（まごぞらさとる）の鶴林波（つるりんぱ）は最高の技だぜ！俺も、あの技が使えたらなぁ」
「男の子はいいね。単純で……あんなの漫画の技じゃない……気で相手を倒すなんて……大体アンタ、山嵐はどうなったの？」
「あれは、今特訓中なのだよ。その後は、鶴林波の特訓だ！」
「だから、あれは漫画の技……龍ちゃんも何か言ってあげてよ」
「鶴林波は、確かに漫画の技だけど、天神流には、気で相手を倒す神技（しんぎ）一天波がある」
「龍一、ホントかよ！？」
「ウソ！」
「ウソかよ」
「当たり前じゃない。あれは漫画の技なんだから……四郎（アンタ）ってホント単純ね」
「うるせぇな～」
「いや、僕が言ったウソというのは、一天波が、正式な天神流の技じゃないということ……天神流の後継者になるためには、全ての技を会得しなくてはいけない。だけど、その技を使った人は、天神斎という人だけで、僕やルナさん、他の継承者となった人たちも、その技だけは、会得出来なかった。天神斎自身も、一度しか使ったことがないと云う……あれは、神の身が使える業……だから、一天波の上に神技がついている」

再び、四人が漫画などの話で盛り上がる。
そして、話疲れたため、三人は帰ることにした。
舞達はお勘定を払おうとするが、瑠奈は、三人からお勘定をもらうつもりはない。
三人は、瑠奈にお礼を言って、店を出た。

しばらくすると、一人の男が店に入ってきた。
「いらっしゃいませ！」
龍一が丁寧に接客した。
男は、長い髪を金色に染め、冷たい瞳をしていた。
瑠奈が珍しく、怯えた表情をしている。
「リュウ……私はこの男と話しがあるから、今日はもういいよ」
「は、はい」
龍一はエプロンを脱ぎ、男の横を通り、そして店を出た。
「久しぶりだな……瑠奈……」
「やはり、生きていたか……凍矢！」
その男こそ、かつて、瑠奈の父と武の命を奪った男、凍矢である。
「俺が今まで、どこにいたか知りたいか？」
「……」
「俺は武との戦いで、重傷を負った。俺の傷が癒える頃、お前は俺より強くなっている……そう思った。だから、それ以上の強さを手に入れるため、俺は、世界に出た！」
「世界！？」
「そうだ！強いヤツを求め、世界に出た！そして、お前に勝てるという自信がつくのに、十年かかった……全ては、お前を、俺のモノにするため……」
「ふざけんじゃないよ！私は、アンタの女になんかならないわ！」
「帰国したのは、一ヶ月前、その間に、お前の事は、いろいろと調べた……アルテミス……裏世界では有名らしいなぁ。それと、お前の弟子でもあり、格闘王の息子でもあるさっきの餓鬼……今は、アイツが、継承者らしいなぁ。破門されたが、俺は全ての技を会得している。アイツを殺せば、俺が、十九代目だ！」
「リュウに手を出したら、殺す！」
「フン、俺を殺す事が出来ないのは、お前自身が、一番よく知っているはずだ～。まあ、天神流の後継者に興味はない……お前が、

俺のモノになれば、それでいいんだ」
「……」
「三日だけ、時間をやる。あの餓鬼の命は、お前の返事しだい……おれは、阿の山で待っているから、いい返事を期待しているぞ！」
そう言って、凍矢は去っていった。
「（この街を出て行くのには、ちょうどいいかも……）」
ついに瑠奈はこの街を出ることにした。

第１４章　さよなら

夕方……
龍一は、弟の龍之介と、ゲームをして遊んでいた。
そんな時、龍一の携帯が鳴った。
瑠奈からだ！
龍一が、電話に出た。
「もしもし……ルナさん！？」
「リュウ、お前に会えて良かった」
「ルナさん？」
「もう、私がお前に教える事は何もない」
「ど、どうしたんですか？」
「私のことは忘れて、幸せになってね。今まで、ありがとう、そして……さようなら……」
そう言って、彼女は、電話を切った。
「も、もしもし？」

龍一は、瑠奈の携帯に掛けるが、つながらない。
瑠奈の店にもかけたが、誰も出ない。
龍一は、瑠奈のことが気になり、急いで店に向かった。

龍一が店に着くと、瑠奈の店は閉店してあった。
「（やはりおかしい……まだ五時過ぎなのに……）」

龍一は、持っていた鍵で、店に入った。
だが、瑠奈の姿はどこにもなかった。
瑠奈の愛車であるフェラーリもなかった。
だが、他の荷物は全てある。
再度、携帯に掛けるが、やはりつながらない。

龍一は、北斗に電話しようとしたが、プレシャスは、今ツアー中であった。
龍一は、舞、一、四郎、さらに、トオルや秀一に電話をし、事情を話した。

しばらくして、五人が現れた。
「みんな、忙しいのに、ゴメン……舞ちゃん、原田さんは？」
「電話したけど、つながらないの……自宅にも行ったけど、いなかったわ」
「そう、ありがとう」
「龍一、分かったぜ！瑠奈さんと、原田さんは、付き合っているんだ！」
「四郎、何言っているのよ」
「四郎君の言うとおりかも……」
「龍ちゃん……」
「でも、相手が原田さんなら……それでルナさんが幸せなら……」
「龍ちゃん、二人が、本当に付き合っているかどうかは、まだ分からないわ。明日は、土曜、学校も休みだし、今からみんなで、探しに行きましょう」
「もういいんだ……原田さんと幸せになっている……そう、信じたい……今日は、ありがとう。みんな……」
「龍ちゃん……」
その後、五人は帰宅し、龍一は、店に残った。

次の日の朝・・五人は、再び店にやって来た。
「おい、龍一、鍵くらいしとけよ」
「あっ、四郎君……皆……僕、そのまま眠ってしまったみたいだね」
龍一は、まだ寝ぼけている感じだ。
「龍ちゃん、大変よ」

「何が？」
「来る途中に、一ちゃんと二人で、原田さんの自宅に行ったら、昨日は、友達と飲んでいて、電話に気づかなかっただけみたい」
「それで？」
「この卒業アルバムを見てよ！」
それは、原田、北斗、瑠奈達の、中学時代の卒業アルバムであった。
「わー、ルナさんの中学生時代……初めて見る。ヤンネーだけど、やっぱ美しいなあ……あっ、この人が、武さんか……」
「もう、後でゆっくり見なさい。それより、コイツを見てよ！」
その男の、写真を見た瞬間、龍一の目が鋭くなった。
「コイツは……昨日の……そんな……まさか昨日来たヤツが凍矢！？じゃ、ルナさんは、コイツのところに！？」
「原田さんからの伝言よ。凍矢には手を出すな！と言っていたわ」
「手を出すなか……そうだよな……俺では勝てないから、ルナさんは……」
「龍ちゃん……」
「俺は出来が悪いからな～、だから……俺にはまだ、ルナさんが必要だ！」
「そうだぜ！龍一！」
「今から僕たちも、瑠奈さんのところに行こう」
「トオル、一君……ありがとう」
「でも、龍ちゃん、瑠奈さんが、今どこにいるのか、分からないじゃない」
「おそらく、阿の山……そこにいると思う……ん？誰か来た！」
龍一達は、店に侵入者が入ってきた事に気づいた。
「泥棒かしら？」
「俺は、ちゃんと、鍵を閉めたぜ！」
「ここに来る！」
ついに侵入者は、龍一達のいるリビングに現れた！
金色の髪に蒼い瞳……外国人の男だ。

「が、外人！？」
「龍ちゃんの知り合い？」
「いや、こういう時は、秀一さんに任せよう」
すると、外人は、
「どいつが、神威龍一だ？」
と日本語で話してきた。
「俺だ！お前は、何者だ？」
「凍矢様の影だ！」
「凍矢の影！？そんなのがいるのか！？それで、俺に何か用か？」
「お前は、凍矢様と、月形瑠奈という女との、結婚を邪魔する気だろう？」
「当たり前だ！」
「二人の結婚を、邪魔するヤツは、殺して来いと命令されている」

「龍ちゃん……コイツ強いわよ」
「ああ、でも今の俺の敵じゃない！」
龍一は、構えた。
「行くぜ！影やろう！」
二人が同時に、回し蹴りを放った。
バシッ！
だが、龍一の方が、速かった。
男は一瞬ふらついた。

「（バ、バカな……俺の蹴りより速いだと……）」
男は、再び構えたが、龍一の鋭い目に恐怖を感じ始めた。
「まだやるか？」
「ま、待て！俺達は、凍矢様……いや、凍矢を憎んでいるんだ」
「俺達！？他にもいるのか？」
「ああ、あの男と戦って、敗れたら、死ぬか、あの男の影になるしかない……そのためには、名前、国、そして、家族までも、捨て

なければならない……お前が、あの男を倒してくれれば、俺は自由になれる」
「ルナさんは、阿の山にいるのか？」
「ああ、だが、あの男に負ければ、お前も影になるか、死ぬかのどっちかだ」
「俺が勝つ！」
「オ、ＯＫ！どのみち、任務を果たせなかった俺は、殺される……俺のためにも、勝ってくれ……それまで、どこかに、身を隠している」
男はそう言って、去っていった。

「みんな、この戦いは、かなり危険な戦いになる。だから、俺一人で行って来る」
「龍ちゃん、私たち、友達よ！それに、瑠奈さんは、私にとっても、大切な人……絶対に、私も行くからね！」
「舞ちゃん……」
「龍一、俺は、お前の力になりたい。だから、俺も行く！」
「四郎君……」
「拳法家として、僕も戦うよ！」
「秀一さん……」
「僕だって、新戦会の四天王の一人……破門覚悟で、僕も行く！」
「一君……」
「龍一、摩利支天は、武士（もののふ）の守護神だぜ！お前の敵は、俺の敵なんだよ！」
「トオル……」
龍一の目から涙が流れた。
「みんな、ありがとう！俺には、もの凄く強い、仲間がいることを忘れていた……」

この一年で、強くなったのは、龍一だけじゃない。

ここに、集まった者達は、皆、常識を超える強さを手に入れた格闘家達だ。

「トオル、お前の、クラウンで行こう」
「ああ、いいぜ」
「僕は、自分の単車に乗っていくよ」
「秀一さん、何に乗っているんですか？」
「フォアだよ」
「へー、フォアか……よし、俺も、久々に単車に乗っていくか」
「龍ちゃん、単車の免許持っていたの？」
「持ってないよ。無免だよ。トオル、俺が、阿の山に行く前に、預けたよな……鍵返してくれ」
「ああ、お前がいない間、ちゃんと綺麗にしといたぜ！」
「さすが！」
「龍一は、何乗っているんだ？」
「ルナさんから、受け継いだニンジャだよ！あっ、俺、気合い入れたいから……二時間後に、また、ここに集合しよう」
「龍ちゃん、何のんきな事を言っているの」
「ゴメン、気合いを入れたいんだ！」
「よし、二時間後に、また、ここに集合だ！龍一……後で、お前の家に行くよ」
「別にいいよ。俺が歩いて、お前の家に行くから……」
「遠慮するな」
「そうか、じゃあ、頼む」

こうして、龍一達は、一度帰宅することにした。
これから始まる戦いのために……

それから、一時間半……

龍一は、金髪に染め、「修羅参上」の特攻服を着て、精神を集中していた。
「林、兵、闘、者、階、陣、列、在、前！」
そして、真剣を手に取り、外に出た。
龍一が、外に出ると、そこには、特攻服を着て、タバコを銜えたトオルの姿があった。
「待たせたな」
「もういいんだな」
トオルは、三十分前から、龍一の家の前に車を止め、彼が出てくるのを、黙って、待っていたのだ。
二人は、車に乗り、龍一の単車を取りに行くため、トオルは、再び、自分の家に戻った。
これが、二人の友情なのであろう。

トオルの家に着くと、龍一は、単車にまたがり、エンジンを掛けた。
そして、二人は、瑠奈の店に向かった。
全ては、大切な人を取り戻すために……

最終章　修羅の者たち（前書き）

これで最終話です！

最終章　修羅の者たち

神威龍一……小学四年生まで、格闘王の息子なのに、弱という理由でいじめられていたが、瑠奈に助けられ、弟子となる。中学時代は、喧嘩屋修羅と名乗り、紆余曲折を経て、天神流の継承者となる。そして、今、大切な人を取り戻すため、仲間と共に、伝説の悪魔との戦いが、始まろうとしていた。

龍一と、トオルが店に着くと、すでに、他の四人は、店の前で、二人を待っていた。
秀一は、Tシャツにジーパン、舞と一は、空手の道着、四郎も柔道の道着を着て来た。
「時間がない。急ごう！」
そう言って、秀一は単車にまたがり、エンジンを掛けた。
舞と一は、トオルの車の後ろに乗り、四郎は、助手席に乗った。
「ん？お、おい、これ、龍一の刀じゃないか！？」
「そうだ、これから始まるのは、殺し合いだ！怖いヤツは、今のうちに、降りろ！」
「私は、降りません！」
「僕も、降りる気はないです！」
「お、俺だって……」
「フッ、ところで龍一、その阿の山ってどこにあるんだ」
「ついてくれば分かるよ」
そう言って、龍一達は、阿の山に向かった。

阿の山……天正伊賀の乱で、生き延びた天神斎が、傷を癒し、二十年以上こもって、天神流を編み出し、その後も、天神流の者たちの、修行の場となった。
そして、武と凍矢の死闘の場ともなった。

だが、その山が、どこにあるのかは、天神流の者たちしか知らない。
阿の山という名前も、天神流の者たちの間で、そう呼ばれているだけ……
阿の山……それは、天神流の者たちだけが知る謎の山……

そして、その阿の山では……

「やっと来たか」
瑠奈が、阿の山に辿り着いた。
「凍矢、山に隠れている奴らは、何者だ？」
「気にするな。ただのパシリだ」
「パシリ！？まあ、いいわ。ここに来る前に、父と母、武の眠る墓に寄ってきた。そして、三人に、凍矢と結婚すると、伝えてきたわ」
「ほう、それでは、俺の女になるんだな」
「ああ、私みたいな女は、お前のようなヤツが、お似合いなのかもしれない」
「そうだ。お前も、俺と同じ人殺し……人殺しの女には、人殺しの男がふさわしい」
「お前の女になるのだから、リュウには、絶対に手を出さないでよ」
「フン、お前を手に入れた今、あんな餓鬼を相手にしてもしょうがない。だが、アイツが、お前を取り戻しに来た時は、全力で潰す！」
「その時は、私が説得するわ」

その頃、龍一達は、阿の山に向かっていた。
その時、向こうから、一台の単車が、逆走してきた。
ギャバババン！
龍一が、単車を止めた！

秀一やトオルも止まった。
「おい、龍一！喧嘩なんかしている場合じゃないぞ！」
「インパルスか……」
そう言って、龍一は、微笑んだ。
龍一には、向こうから来る男が、誰なのかが分かっていた。
そして、トオル達にも分かった。その男が誰なのかが……

ギャバババン！
インパルスに乗った男も、単車を止めた。
「おい、どこに行くんだ？そんなカッコウで……」
「喧嘩しに行くのさ……お前も来るか？虎次郎！」

インパルスに乗った男は、あの大河虎次郎であった。
龍一は、虎次郎に事情を話した。
だが、虎次郎は、龍一や瑠奈のために動いたりしない。
でも、龍一には、分かっていた。
この男も修羅……
相手が、強ければ、強いほど、戦いたくなる男だということを……

「フン・・あの女がどうなろうと、知った事じゃないが、ソイツが強いなら、俺が、ぶっ殺す！」
龍一の予想どおりになった。
その時、
プップー！
後ろから来た自動車が、クラクションを鳴らしてきた。
「お前ら、ジャマだろう！はよ、どかんかい！」
三十代くらいの男性が、車から顔を出し、怒鳴ってきた。
虎次郎が、ガンをつけ、男を威圧した。
「（な、何だよ。コイツら……）」
「おい、龍一！後ろがつまっている。急ごうぜ！」

「ああ、行くぜ！虎次郎！」
「フン……」

こうして、虎次郎という心強い味方が出来た。
虎次郎が、龍一達と違うところは他にもある。
龍一は、天神流忍術
舞と一は、新戦会空手
四郎は、柔道
秀一は、少林寺拳法
トオルは、ボクシング
だが、虎次郎には、格闘技の経験はない。
彼は、ただ一人、修羅場をくぐって、強くなった男だ。

そして、数時間後……

もはや、車が通れる道ではなかった。

ギャバババン！
龍一達が止まった。
「ルナさんのフェラーリだ！これで、間違いなく、阿の山にいることが分かった」
「じゃあ、この辺が、阿の山か？」
「ああ……」
「龍ちゃん、一つ聞くけど、この前とか、どうやって、ここまで来たの？」
「歩いたり、走ったりしてきた。それも修行の一つさ」
「そ、そう……」
「とにかく、ここからは、歩いていこう」
龍一達は、単車や車を置いて歩き始めた。

しばらくすると、龍一が止まった。
「（一、二、三……十四人か……）隠れてないで、出て来い！」
その時、龍一達に向かって、手裏剣が飛んできた！
だが、それを全部、龍一が刀ではね返した！
「いいかげんに、出てきたらどうだ！」
「さすが、天神流の継承者……」
そう言って、ついに、凍矢の影の者たちが現れた！
影の者たちは、黒い忍びの装束に、覆面をしていた。

「覆面をしているから、顔が分からんが、どうせ、ブサイクな顔をしているんだろ！？」
トオルが、挑発をした。
「ここから先は、通さないわ」
「女？なんだ！？女もいるのか？」
「女は私だけ、でも、戦いに男も女も関係ないわ」
「俺達は、ルナさんのところに行きたいんだ。すまないが、退いてくれ」
「それは、出来ないわ。ここを通すなと言われている」
「凍矢を倒せば、アンタらは、自由になれるんだろう」
「私は、凍矢様のためなら、命をも捨てられるわ」
「命をも捨てられる？お前らは、アイツに負けて、命欲しさに、アイツの影になったんだろう」
トオルが、再び挑発する。
「他の者は、そうかもしれないが、私は違う！」
「そうか……どうやら、戦いは避けられないみたいだな」

他の影の者たちも、凍矢の強さと恐怖を知っている。凍矢の命令に従わなければ、殺される。自分達が生きるためにも、龍一達を始末しなければならい。
そして、ついに、影の者たちと、龍一達の戦いが始まった！

その頃、瑠奈と、凍矢は……

「フン、始まったか」

「凍矢、お願い……あいつらには、帰るように言うから、手を出さないで……」

「さっき、言ったはずだ。お前を、連れ戻しに来たら、ぶっ潰すと……それに、あの餓鬼の強さは、本物だ！アイツを、俺のパシリにしてやる！それが、出来ない時は、殺してやる！」

「凍矢……リュウたちに、手を出すというのなら、私は、アルテミスとして、お前を殺す！立て、凍矢！」

瑠奈が、ついに構えた。

「俺が、優しくしてやれば調子に乗りやがって……この馬鹿女が！」

凍矢も立ち上がり、そして構えた。

先に攻撃を仕掛けたのは瑠奈だ。

瑠奈が跳んだ！天誅だ！

瑠奈のかかと落としが決まった！

そしてもう片方の足で、凍矢を蹴り飛ばした。

だが、凍矢は、吹っ飛んだが、倒れなかった。

更に、攻撃は続く、今度は、双龍、そして、奥義龍神を使った。

再び、凍矢がふっ飛んだ！

それでも、凍矢は倒れない。

「どうした瑠奈！お前の力は、その程度か？」

再び、瑠奈が龍神を……

だが、凍矢も龍神を使ってきた。

今度は、瑠奈が、ふっ飛んだ。

瑠奈は倒れたが、すぐに立ち上がった。

今の瑠奈では勝てない。それは、瑠奈自身が、一番分かっている。

だが、それでも、龍一を守るため、再び構えた。

その頃、龍一達も、影の者たちと戦っていた。
影の者たちも、凍矢から、天神流を叩き込まれていた。
しかも、相手は、十四人……
だが、龍一達も、この一年でかなり強くなっている。
龍一達は、血だらけになりながらも、七人まで倒した。
残りは七人……
これで、七対七の戦いになった。
激しい戦いが続く！
そして、ついに、あと一人……
凍矢のためなら、命をも捨てられると言った女だけとなった。
龍一が関節を決めた。雷鳴だ！
関節を決め、投げ、そして、相手の喉に、かかと落し！
「ゴホッ……」
「ハアハア……悪いな……俺達は、どうしても、ルナさんのところに行きたいんだ。」
「龍ちゃん、急ごう」
龍一達は、瑠奈と凍矢のいる場所に向かった。
「ま、待て！」
女は、フラフラになりながらも、龍一達を追った。
龍一達が、瑠奈のところに着くと、そこには、今まで見たこともない、血だらけになった瑠奈の姿があった。
「ルナさん！」
「リュウ……みんなを連れて逃げな」
「俺のパシリ共を倒すとは……ますますお前を、俺の影にしたくなった」
「ああ！？ふざけるな！お前は、俺が倒す！」

「倒す？面白い！やってみろ、コゾー！」
「（うっ・・な、何だ！？アイツの凍りついた瞳は……）」
龍一達は、昔の瑠奈のように、凍矢の凍りついた瞳を見て、動けなくなった。
「どうした？俺が怖いか？」
その時、
「凍矢様！」
フラフラになりながらも、あの影の女が現れた。
「フン、役立たずが、よく俺の前に顔を出せたな。お前らは、後で始末してやる」
「凍矢様に殺されるなら、悔いはありません」
「凍矢！」
瑠奈が再び、凍矢に攻撃を仕掛けた。
だが、凍矢の方が強い。
凍矢の容赦のない攻撃が続く！

「（俺は、何しにここに来たんだ？大切な人を取り戻すために来たんだろう……）」
凍矢の龍神で再び、瑠奈はふっ飛んだ。
瑠奈は、倒れたが、再び立ち上がり、構えた。
「クソ、俺の龍神を、二度も喰らって、まだ、立ち上がれるとは、だが、次こそ……」
その時、
「凍矢！俺の大切な人を、絶対にゆるさねぇ！」
龍一が、凍矢の恐怖に勝ち、そして、構えた。
「リュウ！」
「ほう……さすがだな。それでこそ、天神流の十八代目だ」
「（ハヤト、お前の技を借りるぞ！）」
龍一は、ハヤトが編み出した抜刀術、不知火をする気だ。
「（殺す、殺さない、などという雑念は捨てろ……何も考えぬ事

……無念無想……）」
龍一が、正面から突っ込んだ！
「（な、何だ！？）」
龍一が、刀に手を……
「（そうか、抜刀術か！）」
凍矢は、本能的に避けようと、右後ろに跳んだ。
龍一は、凍矢の動きを読み、そして、凍矢の背後を取った。
「（くそ餓鬼が！）」
龍一が、抜刀しようとした。
だが、凍矢は、刀の柄を左手で鞘に押さえ込んだ。
そして、凍矢の後ろ回し蹴りが炸裂した！
バシッ！
龍一はふっ飛び、そのまま倒れた。
「コゾー、俺は、世界を相手にしてきたんだ。お前らとは、くぐった修羅場が違うんだ」
「（ダ、ダメだ……勝てない……）」
龍一に、再び恐怖が襲う
舞達も恐怖で動けない。
だが、もう一人、凍矢の恐怖に勝ったヤツがいた。
虎次郎だ！
虎次郎は、拳を強く握り、凍矢に殴りかかった。
だが、勝てるはずがない！
それでも、虎次郎は、戦った。
それを見ていた舞、一、四郎、秀一、トオルも、恐怖に勝ち、凍矢に立ち向かった。
「クズ共が！」
だが、次々に、龍一の仲間が倒れていく……
「みんな！」
「リュウ！」
「ルナさん！大丈夫ですか？」

「私はいいから・・お前は、アイツらを連れて、ここから逃げるのよ」
「そ、それは出来ません！」
「これは命令よ」
「俺は……出来の悪い弟子です……だから、俺には、ルナさんが必要なんです！」
龍一が立ち上がった。
「アイツに勝てる方法が分かりなした……神技一天波……」
神技一天波……天神斎しか使えなかった幻の技……
「リュウ……そうね。お前なら出来るかも……」
龍一は、右の拳を強く握り、気を一点に集中し始めた。
「リュウなら出来ると、信じるわ！」
そう言って、瑠奈も再び凍矢に立ち向かった。
「（あの餓鬼、何をする気だ？まさか！あの技を？）」
凍矢がそう思った瞬間、瑠奈の天誅が炸裂！
「クソアマー！」
「みんな、下がっていなさい」
「瑠奈さん！」
「リュウが、気を集中している間、お前の相手は、私がするわ」
「フン、あの餓鬼に、あの技が出来るわけがない」
二人が、三度目の龍神を使った。
今度は、凍矢がふっ飛び、倒れた。
「凍矢様！私も……」
影の女は、凍矢を助けようとしたが、
「クズの力などいらん！」
そう言って、凍矢は、立ち上がった。
激しい戦いが続く
「（まさか、この俺が負ける！？）」

凍矢も瑠奈も、限界を超えていた。
「クソアマー、これで死ね！」
凍矢が、四度目の龍神を使おうとした。
だが、
「な、何だ？この気は？」
凍矢の動きが止まった。
「あのコゾーが？まさか……」
凍矢が、龍一に恐怖を感じた。
「凍矢（アンタ）の怯えた顔、やっと見られたわ……リュウ！今よ！」
瑠奈が、その場を離れた。
「う、動けん！」
今度は、凍矢自身が、金縛りにかかった。
影の女は、凍矢を守りに行こうとするが、彼女の体も、思うように動かない。
「くたばれー！凍矢―！」
ついに、龍一が一天波を放った！

神技一天波……全身の気を一点に集中し、その時に放たれた衝撃波で、相手に触れることなく、相手の全身の骨を砕き、確実に相手を殺す！まさに神の業だ！

凍矢は、吹っ飛び、そのまま、動くことはなかった。
「凍矢様―！」
影の女が、泣き叫んだ。
「龍一、殺ったのか！？」
トオルが叫んだ。
龍一は、そのまま、後ろに倒れそうになったが、瑠奈が抱きとめた。
「リュウ！」
「ルナさん……人を殺すって、イヤなことですね……俺は、その罪を背負って、生きていかなければならない……ルナさんも、この

苦しみを、ずっと背負って、生きてきたんですね……俺もこれから、一人で、この苦しみを背負って、生きていくのか……」
「リュウ、お前一人、苦しませたりはしない……これからは、私と二人で、その苦しみを背負って、一緒に、生きていこう」
「ルナさん……」
「リュウ……愛しているわ！」
「ル、ルナさん……お、俺も……俺も愛しています！」
二人は、そのまま熱いキスをした。
「龍ちゃん……良かったね」
その時、影の女が覆面を取った。
黒い髪に、ショートヘアー……
顔は、瑠奈に負けないくらい、綺麗な顔立ちをしている。
「へー、すげー美人じゃん！」
四郎の心が、一瞬、ときめいた。
「もう、私は、凍矢様の影じゃない……私の名は、春麗、生まれは、中国北京……」
「春麗か……いい名前だ」
「四郎、どうしたの？」
「な、なんでもない」
「私は、他の影の者たちと違って、凍矢様と戦ったことはない……七年前のある日、私は、三人組の男性に、犯されそうになった。その時、私を、助けてくださったのが、凍矢様……」
「七年前！？俺が、ルナさんに助けられた時だ」
「その時、凍矢様は、お前を助けたわけじゃない、ただ、イライラしていたから、腹いせに、虫を殺しただけだ……そうおっしゃっていたわ。でも、私にとっては、命の恩人、だから、凍矢様の影となり、凍矢様に恩返しがしたかった。でも、結局、なんの役にも立てなかった……」

春麗は、そのまま、凍矢の亡骸を抱いて、崖の方に向かった。
「凍矢様……私も、そちらの世界に行きます。今度こそ、凍矢様の役に立てる女になります」
春麗は、凍矢を抱いたまま、崖から飛び降りようとした。
その時、四郎が、
「待てー！」
と叫んだ！
「お前が、本当に、凍矢のことを思うなら、お前は、凍矢の分まで生きるべきだ！」
春麗の足が止まった。
「お前にとって、俺達は敵かもしれない。けど、俺は……お前に……一目惚れした……お前は、美人だし……だけど、それだけじゃない！お前が、凍矢を思う純粋な心に、俺は、俺は惚れたんだ！」
「……！」
春麗の心が揺れ動いた。
「べ、別に、付き合ってくれとは、言わない……ただ、生きてほしい」
春麗の目から、涙が流れた。
「フッ、敵か……そうだな。お前達は、凍矢様の……私の敵……凍矢様の仇を討つためにも、私は生きる！」
彼女は死ぬ事より、生きる事を選んだ。
そして、凍矢を抱いたまま、山を降りていった。

人は、生まれ、そして、いつか死んでいく
だから人は、今を、一生懸命、生きるのだろう

「四郎君……」
「瑠奈さん、みんな、いいんだ……彼女が生きていてくれれば……さあ、帰ろうぜ！」

山を降りた時、すでに、他の影の者たちの姿はなかった

そして、七年の時が流れた……

龍一は、プロの格闘家となっていた。
彼は、七年の間に、表だけでなく、裏で、生と死を懸けた戦いをし、全て、勝利している。
もちろん、相手を殺したりはしない。
彼が殺したのは、凍矢だけ……
一天波を使ったのも、あの時だけ……
また、六年前に瑠奈と結婚して、五年前に、娘も生まれている。名前は、聖華……

龍一は、めったに、弟子を取らない。
現在、彼の弟子は、娘、聖華と、弟の龍之介、そして、大空達也だけである。
かつて、南が、命を犠牲にしてまで、助けた時の子供……それが、大空達也である。
達也は、南の分まで、一生懸命生きたい……その熱意に応えるため、龍一は、達也を弟子した。

瑠奈は結婚後、喫茶店は、経営しているが、裏世界は引退した。
また、七年前に、メジャーデビューしたプレシャスの、ニューアルバム「レ・ジェンド」の、最後の曲に、龍一はピアノ、瑠奈はヴァイオリンとして参加している。
曲名は、「Ｒｅｓｔ　Ｉｎ　Ｐｅａｃｅ」意味は、安らかに、眠りたまえ……
北斗の妹、南のために、作られた曲である。

また、龍一や瑠奈と共に、凍矢たちと戦った修羅の者たちも、それ

ぞれの道を歩んでいる。

新戦会の四天王の一人、沖田一は、舞と、四年前に結婚し、後藤家に婿入りした。
彼は、沖田一から、後藤一となった。
二年前には、息子も生まれた。名前は、後藤誠……
また、新戦会は、東京と大阪に、支部を作った。
東京には、土方が、大阪には、永倉と原田が任された。

四郎は、実家が、中華料理店を経営しているので、彼は、店を継ぐために、中華料理の修業をしている。
そして、最近、この中華料理店に、一人の中国人女性が、お客として現れる。
女性の名は、春麗……
凍矢の影だった女……
二人は、付き合っていないが、それに近い存在だ。

秀一は、大学を卒業後、北斗や南の父、杉原グループの会長に見込まれ、養子となっている。彼が後に、杉原グループを背負っていくのであろう。
また、結婚はしていないが、恵とは、今でも付き合っているようだ。

トオルは、プロボクサーとなり、異種格闘技戦で、龍一と再び戦うが、敗北……
また、彼は、現在、アリスのリーダー麻奈美と付き合っている。
アリスも、三年前にメジャーデビューして、活躍している。

虎次郎は、現在も無職で、相変わらず、強いヤツを求めて、喧嘩をしている。
龍一とは、裏で、生と死を懸けた戦いをするが、ついに、龍一が勝

利し、虎次郎は、敗北した。

神威　龍一……

かつて、いじめられていた少年だが、瑠奈の弟子となり、この時から、彼の戦いは始まった。

そして、これからも、戦い続けるだろう……

強いヤツを求めて……

最終章　修羅の者たち（後書き）

ご愛読ありがとうございます＾＾

これからも病気に負けないで、頑張って生きて行きたいと思います！

平成２１年５月　生時！押忍！

参考資料

秘伝　ＢＡＢジャパン

武術（ウーシュウ）　福昌堂

山崎照朝の実戦空手　池田書店

少林寺拳法奥義　東京書店

喧嘩芸骨法　二見書房

忍者のすべて　新人物従来社

格闘新書　ベースボールマガジン社

新格闘教書　三天書房

修羅の刻パーフェクトガイド　講談社

など

おまけ

天神流の技紹介！

天誅……相手の頭上より高く跳び、一回転してかかと落とし、さらにもう片方の足で相手を蹴り飛ばす。

双龍……後方宙返りと同時に顎に蹴りを、さらに体をひねらせ、こめかみにもう片方の足で蹴りを放つ。

雷鳴……関節を決め、投げて、地面に叩きつけた後喉にかかと落と

し。

鉄槌……足払いをし、相手が倒れそうになった瞬間、顔をつかみそのまま地面に頭を叩きつける。

閃光……神速で相手に袈裟斬りをし相手を瞬殺する天神流の剣術。
だが、この技をかわされた時、突き又は薙ぎなどに変換し、第２の攻撃を行うことを「雷」と呼ぶ。
素人なら最初の一撃で瞬殺、玄人さらに達人でも第２の攻撃「雷」で勝負が決まる。

龍神……天神流の奥義。
龍神は水神……降りしきる大雨を、避けるのは不可能……まさに奥義龍神は、降りしきる大雨。
常識を超えるスピードで相手の急所を確実に攻撃する。あまりの速さで数秒の間、相手を宙に浮かし動きを封じる。これが龍神である。

一天波……本来天神流の継承者は全ての技を会得しなくては継承者にはなれない。
だが、開祖の天神斎を含め、誰も極める事が出来なかった技。
そのため天神流では「神技（しんぎ）」と呼ばれている。
全身の気を一点に集中し、その時に放たれた衝撃波で、相手に触れることなく、相手の全身の骨を砕き、確実に相手を殺す！まさに神の業だ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2008g/

武勇伝（改）

2011年3月8日15時19分発行